Ⅴ　中世城館等測量調査

1　調査概要と目的

（1）調査期間　令和５年 10 月 20 日～令和６年３月８日

（2）調査場所　南陽市漆山・梨郷地内

（3）調査目的

対象地は、南陽市漆山および梨郷（和田地区・竹原地区）に位置する山地で、大滝沢館跡とその周辺地である。漆山館跡、赤松山館跡、片岸館跡、稲荷山物見跡、阿弥陀山物見跡が周知の中世城館跡として登録されている。今次調査では大滝沢館跡を中心に周知の館跡の規模や正確な位置を把握することを主たる目的とし、併せて未確認の城郭遺構や鉱山跡、炭窯跡等の把握を行い、遺跡台帳を整備し、今後の調査や遺跡保護に資するため赤色立体地図等の作成を行うこととしたものである。

2　調査方法

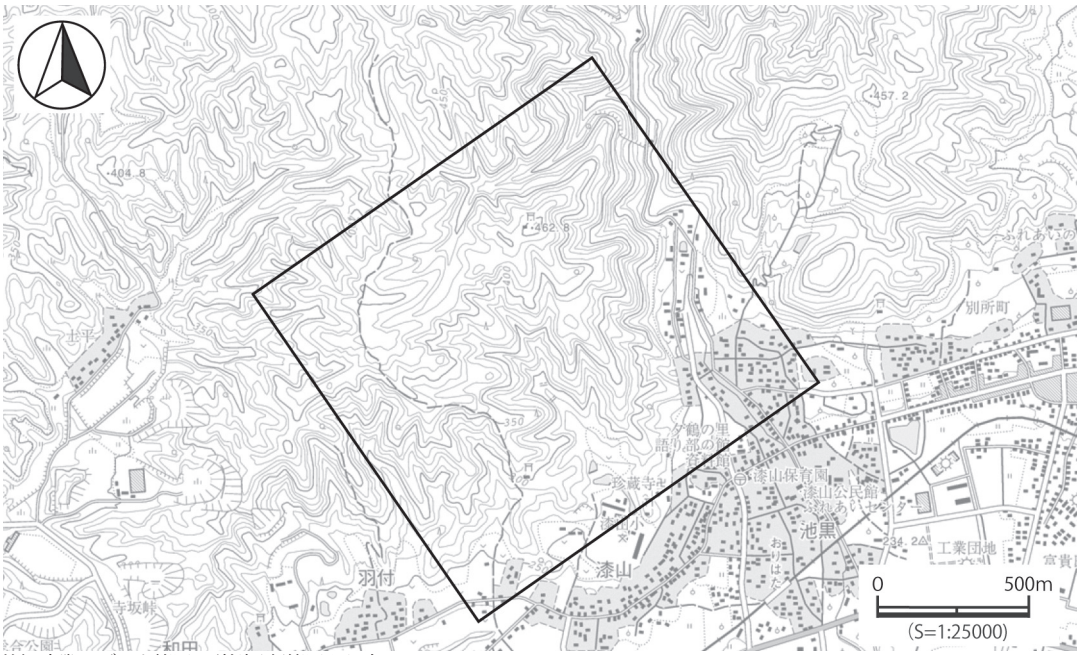
調査地の現況は山林であることから、落葉後に航空レーザー測量および現地での補助測量を実施し、赤色立体地図を元に館跡の略図を作成した。なお、略図は読み取った地形の概略図である。主たる計測範囲は大滝沢館を中心とした 2.1 ｋ㎡であるが、計測範囲は可能な限り広くとることとした。

第 70 図　調査遺跡位置図

3　測量方法と経過

測量計画は、ＧＮＳＳ衛星配置等を考慮し、計測諸元、飛行コース、ＧＮＳＳ基準局の設置場所およびＧＮＳＳ観測について作成し、0.5m のグリッドデータ作成を行うため１ｍ×１ｍに４点以上の計測データを取得するものとした。

３次元航空レーザー測量は航空レーザー計測システムおよびＧＮＳＳ／ＩＭＵ装置を搭載した航空機を用いて実施した。航空レーザー測量データ（ＧＮＳＳ基準局のＧＮＳＳ観測データ、航空機上のＧＮＳＳおよびＩＭＵ観測データ、レーザー測距データ）を統合解析し、地表のレーザー照射位置の三次元座標を求めた。調整用基準点を設定し、三次元計測データを補正した。補正後のオリジナルデータから、建物や植生等の地物を除去したグランドデータを作成、これを基に等高線データ、赤色立体地図となる地形表現図を作成した。



注）実際のデータ範囲は計測飛行範囲より広い。

第 71 図　計測飛行範囲図

4　主な成果

大滝沢館跡の実態が明らかとなったほか、これまで存在が知られていなかった和田館山館跡、深沢館跡、雪ケ沢物見跡の３遺跡を新規に確認した。また、各城館遺跡の遺構把握や遺構配置等の確認ができた。以下、主な館跡について報告する。

（1）大滝沢館跡（第 72 図）

大滝沢館跡は、漆山字大滝沢、館ヶ沢、雪ヶ沢に位置し、令和３年度の広域分布調査による踏査で確認された。主要地方道米沢・南陽・白鷹線の西側の山地で、織機川の米沢盆地への谷口を見下ろす山の頂上にあたる。漆山の珍蔵寺や漆山館から主郭のある山頂までは直線で約 960 ｍの距離で、主郭の標高は約 460 ｍである。館の規模は東西約 130 ｍ、南北約 175 ｍである。主郭には虚空蔵菩薩の石祠（天明八（1788）年）があり、南斜面に参拝用

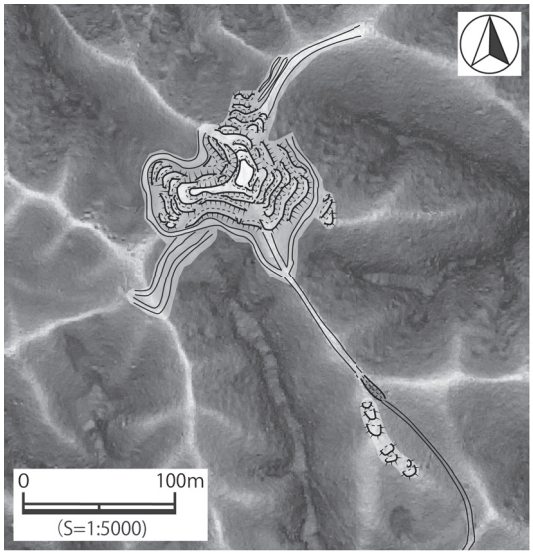
の石段が造られている。

主郭北と南方向に延びる尾根上に階段状曲輪、南東方向に帯曲輪群が見られ、主郭南西方向に堀切を配する。堀切は上場幅が約 7m、下場幅が約 2.2m を測る。館周辺の斜面には表層崩落による鱗状の地形が多く見られる。

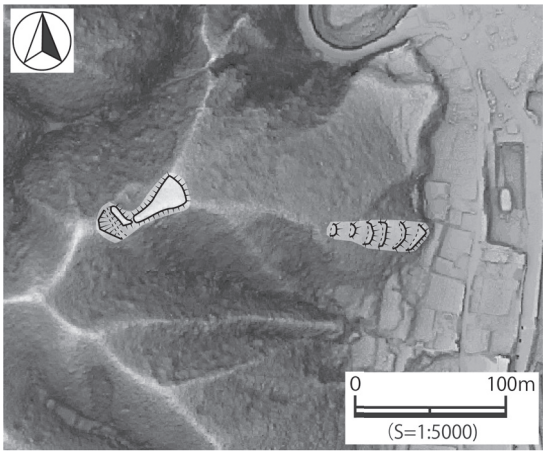
また、南から館に至る道は尾根道であるが、館に近いところで道が尾根を外れて斜面や谷部を通り尾根部に小規模なテラス群が見られる地点がある。これも館に関連する遺構か。

（2）雪ケ沢物見跡（第 73 図）

雪ケ沢物見跡は、漆山字雪ケ沢、深沢に位置する。織機川の米沢盆地への谷口にあたり、織機川を挟んで東には池黒館山館跡が立地する。今次調査で新規に確認された。標高約 380m の山頂は平坦だが、あまり人の手は入っていないように思われる。山頂西側に土塁と大きな堀切を有する。東から山頂に続く尾根の下半に 6 段の腰曲輪を連続配置している。堀切を越えた先に立地する大滝沢館跡に関連した城郭遺構である可能性もあるが距離がやや離れているため独立した物見跡としておく。



第 72 図　大滝沢館跡略図



第 73 図　雪ヶ沢物見台略図

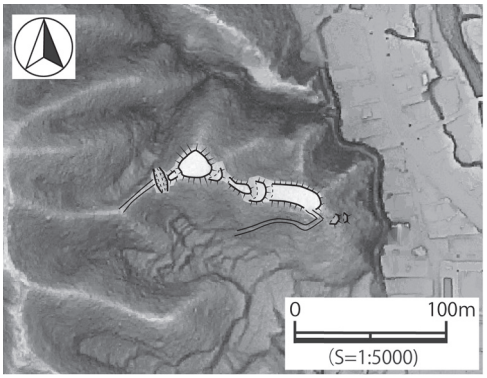
（3）深沢館跡（第 74 図）

深沢館跡は、漆山字深沢に位置する。米沢盆地への谷口から南へ約 450 m、織機川右岸の山地の枝尾根東端にあたる。今次調査で新規に確認された。大滝沢館跡の主郭からは南東に約 650 mの距離にある。深沢館跡の南には漆山神社が所在する。また嘉永元（1848）年漆山村図から山裾付近には医王寺があったとみられる。字深沢の東側の字名は「上達」で、これは「上館」からの転化の可能性がある。主郭の標高は約 300m。館の規模は南北約 46 m、東西約 127 mである。主郭の背後に堀切を有し、尾根端に位置する長方形の曲輪から枝尾根頂の主郭まで直線的に曲輪を配置する。館の南斜面裾に位置する谷間（字小林）の段々畑は、中央に堀底道状の道を配し左右に段々のテラスを配する。その形状は中川地区の虚空蔵

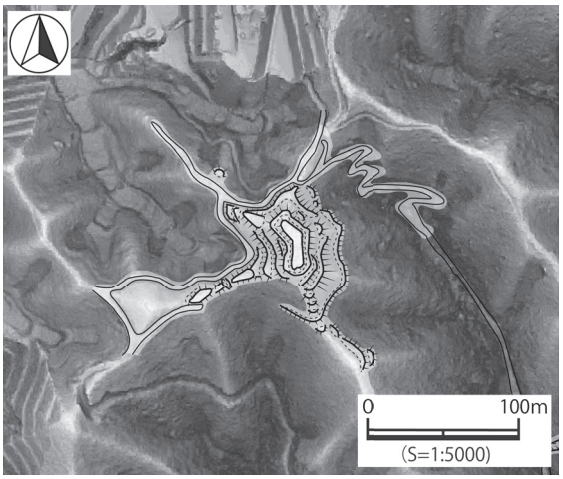
山館跡の根小屋付近に類似するものがあり、この谷も根小屋等、館域に含む可能性があろうか。

（4）和田館山館跡（第 75 図）

和田館山館跡は、梨郷の和田地区北側の山中、和田字館山二、字元山一、竹原字鈴之切に位置する。今次調査で新規に確認された。主郭のある尾根の南端に片岸館跡、谷を挟んだ東側の枝尾根上に赤松山館跡が隣接する。片岸館跡の裏から北に延びる谷の字名は「七曲」である。この字七曲りの北端に和田館山館跡に続くつづら折りの坂があり、ここが虎口となる。主郭を中心にその周囲に帯曲輪群を配する形状は大滝沢館跡に似ており、隣地でありながら階段状曲輪で構成する赤松山館跡とは異なっている。主郭の標高は約 408 mで、館の範囲は東西約 140 m、南北約 183 mである。片岸館跡の詰めの城のような役割の館とも考えられる。



第 74 図　深沢館跡略図



第 75 図　和田館山館跡略図

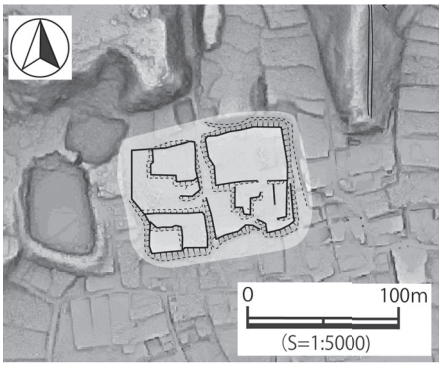
（5）片岸館跡（第 76 図）

片岸館跡は、梨郷の和田字片岸、字堤端に位置する。館山の山裾にあたる。標高は約 250m で館の形状は東西に長い長方形で東西約 117 m、南北約 83 mである。北辺を深い堀で区切り、東は館山から流れる谷川で区切られる。明治期の字限図からは西側の墓地（岩秀山正寿院の址）との境や南辺東側にも堀や水路があったことがわかる。梨郷村史によれば長井氏の時代（1115 ～ 1380 年）に地頭大江時広の家臣の片岸右京が館を築いて東北に鬼門鎮護の屋敷神を再建したという。伊達氏の時代の館の状況は不明であるが、この時代（1380 ～ 1591 年）の片岸地内の土地所有者は以下のようになっている。大永 5（1525）年『伊達稙宗安堵状』では「湯村犬松、中野常陸介」。天文 22（1553）年『晴宗公采地下賜録』では「湯村藤七、湯村藤左衛門、湯村大炊助、湯村くに松、山路四郎、中野常陸介」。天正 12（1584）年『下長井段銭帳』では「木村満六、目黒左近、湯村図書、小嶋又十郎」。このうち度々名前が現れる湯村氏は伊達家臣で、梨郷村史によると、同じ和田地区にある割田

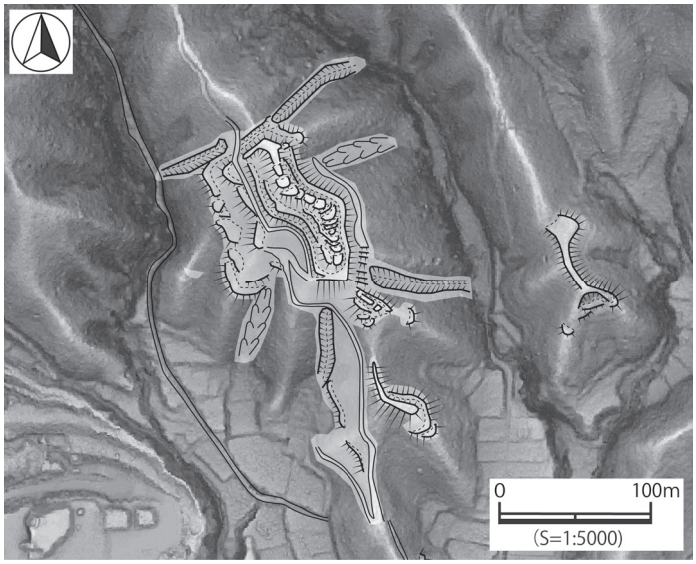
館跡に居住していたとされる。片岸館との関係は不明であるが、片岸地内にも多くの土地を有していたものと思われる。

（6）赤松山館跡（第 77 図）

赤松山館跡は、梨郷の和田字館山一、字毘沙門沢三、字館下に位置する。片岸館跡から約 300 m北の尾根に立地する。主郭の標高は約 360 m、館の規模は東西約 108 m、南北約 240 mである。西側の山すその字館下付近を根小屋とみる。尾根に沿って比較的小規模な曲輪を連続配列する階段状曲輪群からなる館の形状は同じ和田地区の竈山館跡に類似する。東側斜面の 2 本の帯曲輪のうち下段の帯曲輪の南端には畝状竪堀が見られる。畝状竪堀は、市内では今のところ梨郷上館と赤松山館でのみ確認されており、梨郷以外の地区では見られないことから地域的な特色とも思われる。伊達氏が置賜地方を征服する以前からの国人領主で宮内を拠点とした大津氏の西方、最上川水運の要地で上長井と下長井の境でもある梨郷に配置された伊達家臣、増田氏や湯村氏の築城技術の系譜の違い、或いは築城・改修時期の違いが関係しているのであろうか。



第 76 図　片岸館跡略図

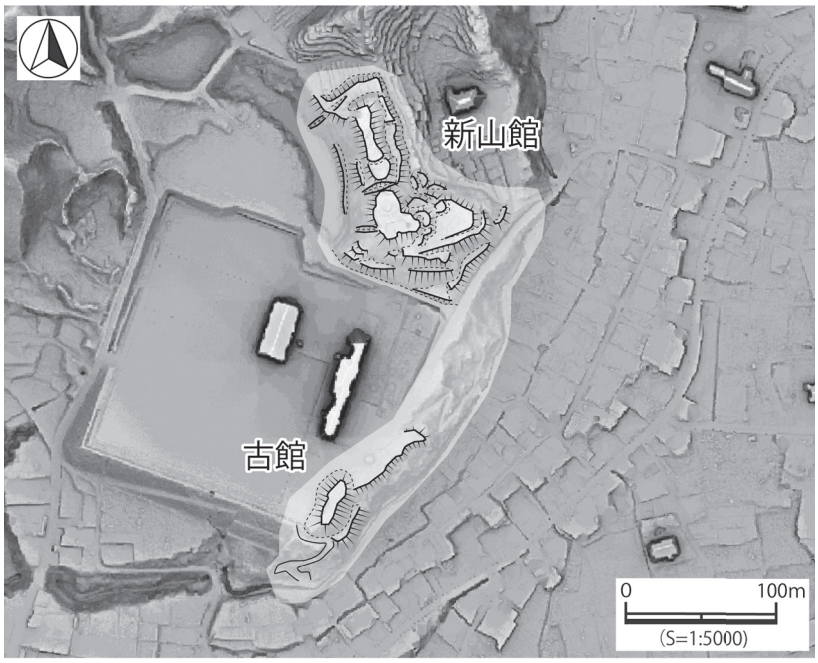


第 77 図　赤松山館跡略図

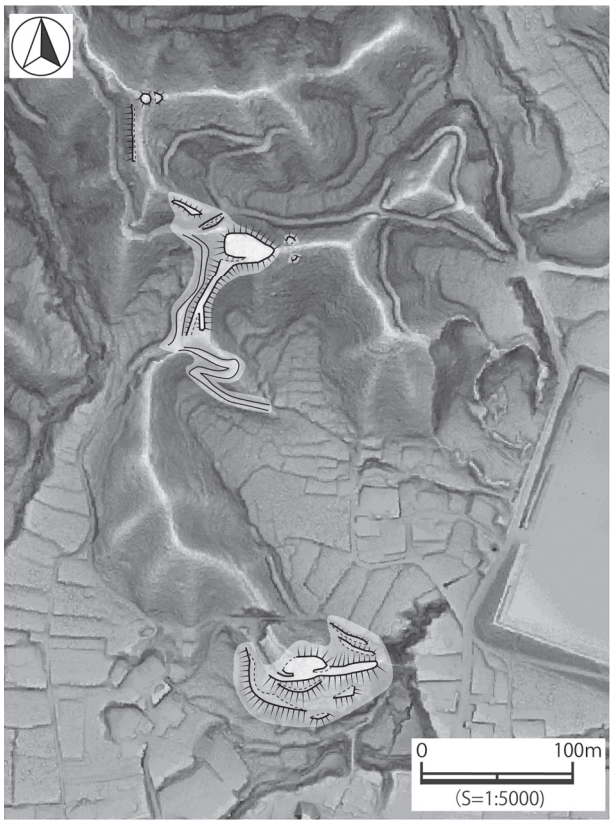
（7）漆山館跡（古館・新山館）（第 78 図）

漆山館跡は、漆山字古館、字屋敷浦、字新山、羽付字東入、字稲荷下二、字道下に位置する。織機川右岸の山地の南東端にあたる。漆山小学校のある場所を古館、新山観音がある場所を新山館と言う。地元の言い伝えでは元々主郭のあった場所が古館で新山館は物見であったが後に物見を館に造り替えたという。古館は昭和 8 年の学校建設で主郭のあった山頂部は削平されて消滅し、現在は縁辺の斜面部のみが残存する。新山館は標高 274 mで、館の規模は東西約 125 m、南北約 158 mである。漆山館全体では、東西約 170 m、南北約 360 mとなる。館の山裾を廻る字西屋敷一帯は根小屋と伝わる。館主は不明であるが、天正 13(1585) 年『北条段銭帳』では、新山在家や新山を領していたのは粟野右衛門という人物である。赤湯の二

色根館に拠点を置く粟野氏の影響が当地域にも及んでいたとも考えられる。



第 78 図　漆山館跡（古舘・新山館）略図



第 79 図　稲荷山物見跡（北側）阿弥陀山物見台（南側）略図

参考・引用文献

1985　米沢市史編さん委員会『米沢市史資料編Ⅰ』米沢市教育委員会
1995　山形県教育委員会　『山形県中世城館遺跡調査報告書　第 1 集（置賜地域）』山形県教育委員会

第六次長岡南森遺跡確認調査（概報）

本報告は、文化庁の補助を受けて令和５年度に南陽市教育委員会が実施した長岡南森遺跡確認調査に関する調査報告である。

調査は、南陽市教育委員会が実施した。

出土遺物、調査記録類は報告書作成後、南陽市教育委員会が保管する。

凡　　例

調　査　主　体	南陽市教育委員会社会教育課埋蔵文化財係	
調　査　期　間	令和５年５月１日から令和５年７月 19 日	
発掘調査担当者	社 会 教 育 課 長	山口広昭
	調　査　主　任	角田朋行（課長補佐兼埋蔵文化財係長）
	埋 蔵 文 化 財 係 再 任 用 職 員	江口利明
	埋蔵文化財係会計年度任用職員	斉藤紘輝
整理作業担当者	埋蔵文化財係会計年度任用職員	吉田江美子
	埋蔵文化財係会計年度任用職員	山田　渚

1　長岡南森遺跡確認調査委員会の構成は以下の通りである。

菊地　芳朗（福島大学行政政策学類教授）

北野　博司（東北芸術工科大学歴史遺産学科教授）

青木　敬　（國學院大學文学部史学科教授）

佐藤　庄一（山形県考古学会顧問・南陽市文化財保護審議委員）

（順不同、敬称略）

2　本報告書の執筆については角田朋行・吉田江美子が担当した。遺物写真撮影は山田渚、報告書デジタル編集・構成作業は吉田江美子・山田渚が担当した。

3　挿図の縮尺はスケールで示した。

4　本書で使用した遺構の分類記号は下記の通りである。

ＳＴ・・・竪穴住居跡　　ＳＰ・・・ピット・柱穴　　ＳＡ・・・柵列

ＳＤ・・・溝　　ＳＫ・・・土坑

5　写真図版は任意の縮尺で採録した。

6　調査にあたっては、土地所有者の皆様をはじめ、次の方々によるご指導、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。（五十音順・敬称略）

南陽市シルバー人材センター、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
青木敬　阿部明彦　植松暁彦　大澤正吾　菊地芳朗　北野博司　佐藤庄一　辻秀人

7　遺跡の基準点設置は、明光技研株式会社に委託した。
放射線炭素年代測定は、山形大学高感度加速器質量分析センターに委託した。

Ⅰ　調査の経緯と目的

第１節　調査に至る経緯

長岡南森遺跡は、南陽市赤湯地区長岡の南側にある独立丘陵地に位置する。その存在は以前から知られていたが、稲荷森古墳の測量図を作成・大型前方後円墳であることを発表した稲荷森古墳調査団により昭和 53（1978）年に縄文～中世の遺跡として確認された（1987 南陽市史編さん委、2004 佐藤鎮雄）。

平成 28（2016）年、南陽市教育委員会は近年の遺跡周辺における急速な土地開発を鑑み、遺跡の現状把握と今後の調査および保護の基礎資料を得ることを目的とした航空測量調査を実施した。その結果、長岡南森遺跡は中世城館もしくは古墳であった可能性について検討するとともに、稲荷森古墳との関連が考えられることから平成 30（2018）年に確認調査を実施した。令和元（2019）年からは長岡南森遺跡確認調査委員会を設置しその指導のもと発掘調査を開始した。今年度は第６次確認調査となる。

第２節　調査期間と目的

今年度のトレンチ調査の総面積は 224.7㎡となる。

（１）調査期間

令和５年（2023 年）５月１日～７月 19 日

（２）第６次確認調査の調査地

山形県南陽市長岡 650-1、1615-1、1616、1618、1650-1、1662、1674、1613、1614、1615-2、1621、1622、1625、1634、1635、1636、1637、1638、1619、1620、1639

（３）第６次確認調査の目的

長岡南森遺跡の性格把握および南森丘陵の地形とその成因の把握を目的とする。調査にあたって下記の目標を設定した。

・丘陵の地形および成因を把握すること。

・昨年度判明した丘陵頂部の集落遺跡の内容を把握すること。

・大溝跡、斜面途中のテラス、土塁、柵列等を確認しその時期等を把握すること。

・次年度調査計画立案のための基礎データの収集および課題の把握を行うこと。

表２　グリッド数値表

杭	X	Y	H
A	-217662.008	-59334.244	217.106
B	-217652.008	-59274.244	219.639
C	-217642.008	-59294.244	220.254
D	-217622.008	-59314.244	216.293
E	-217622.008	-59284.244	219.175
F	-217602.008	-59284.244	219.974
G	-217672.008	-59324.244	217.744
H	-217632.008	-59304.244	218.397
I	-217622.008	-59264.244	216.437
J	-217582.008	-59284.244	218.393
K	-217572.508	-59294.244	216.249
L	-217732.008	-59304.244	215.035
M	-217732.008	-59284.244	216.860
N	-217672.008	-59274.244	222.246
O	-217662.008	-59284.244	221.776
P	-217682.008	-59254.244	222.245
Q	-217682.008	-59224.244	219.602

第３節　調査方法

（１）グリッドの設定（第 80 図）

南森丘陵の測量図を基本にグリッドを設定した。グリッドは 10m × 10m で丘陵南北軸を基

線とし、南森丘陵の東西方向をアルファベット大文字で東からＡ～Ｒに、南森丘陵の南北方向を数字で北から１～ 22 とした。現地で設営した基準杭は、グリッドの西北角に配置し、13 ケ所の基準杭（Ａ～Ｑ）を設置した。座標値は表２のとおりである。

（２）調査地点の設定

長岡南森遺跡確認調査委員会の指導をもとに調査地点を検討し、地権者から発掘調査の承認が得られた範囲内にトレンチを設定した。

Ｎ 14 グリットにＴ 19、Ｌ 15 ～Ｆ 15 グリットにＴ 20 ａ・Ｔ 20 ｂ・Ｔ 20 ｃ・Ｔ 20 ｄ、Ｈ 14 Ｇ 14 グリットにＴ 21、Ｇ 15 ～Ｅ 12 グリットにＴ 22 ｂ・Ｔ 22 ｃ・Ｔ 22 ｄ・Ｔ 22 ｅ、Ｋ 14 ～Ｋ 15 グリットにＴ 23、Ｋ 14 グリットにＴ 24 の計 12 地点を設定した。

（３）発掘調査

最初にサブトレンチを入れ土層を確認した後、面的に掘り下げて遺構検出を行った。

遺構、平面図、断面図作成は１/10、1/20 の縮尺を基本とした。形状のわかる遺物や遺構内から検出された遺物は出土状況を図化および写真記録を行い取り上げた。撹乱層の遺物および細片等の遺物は１ｍグリットの調査区画ごとに取り上げた。

第６次調査となる発掘は、地権者の承諾を得た上で令和５年５月１日～７月 24 日の期間で実施した。詳細は以下の通りである。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

５月１日（月）　Ｔ 20 ａ～Ｔ 20 ｄ、Ｔ 21、Ｔ 22 ｂ～Ｔ 22 ｄトレンチの設定作業、杭打ち。

５月８日（月）　Ｔ 19 トレンチの設定作業、杭打ちを行う。

５月９日（火）　現場テント設営場所の草刈り作業、資材搬入・テント設営作業、各トレンチ予定地周辺の草刈りや支障木除去等の環境整備作業、安全管理のため通路の環境整備作業。Ｔ 23、Ｔ 22 ａのトレンチ設定作業。Ｔ 19、Ｔ 20 ｃから手掘りによる掘り下げ。

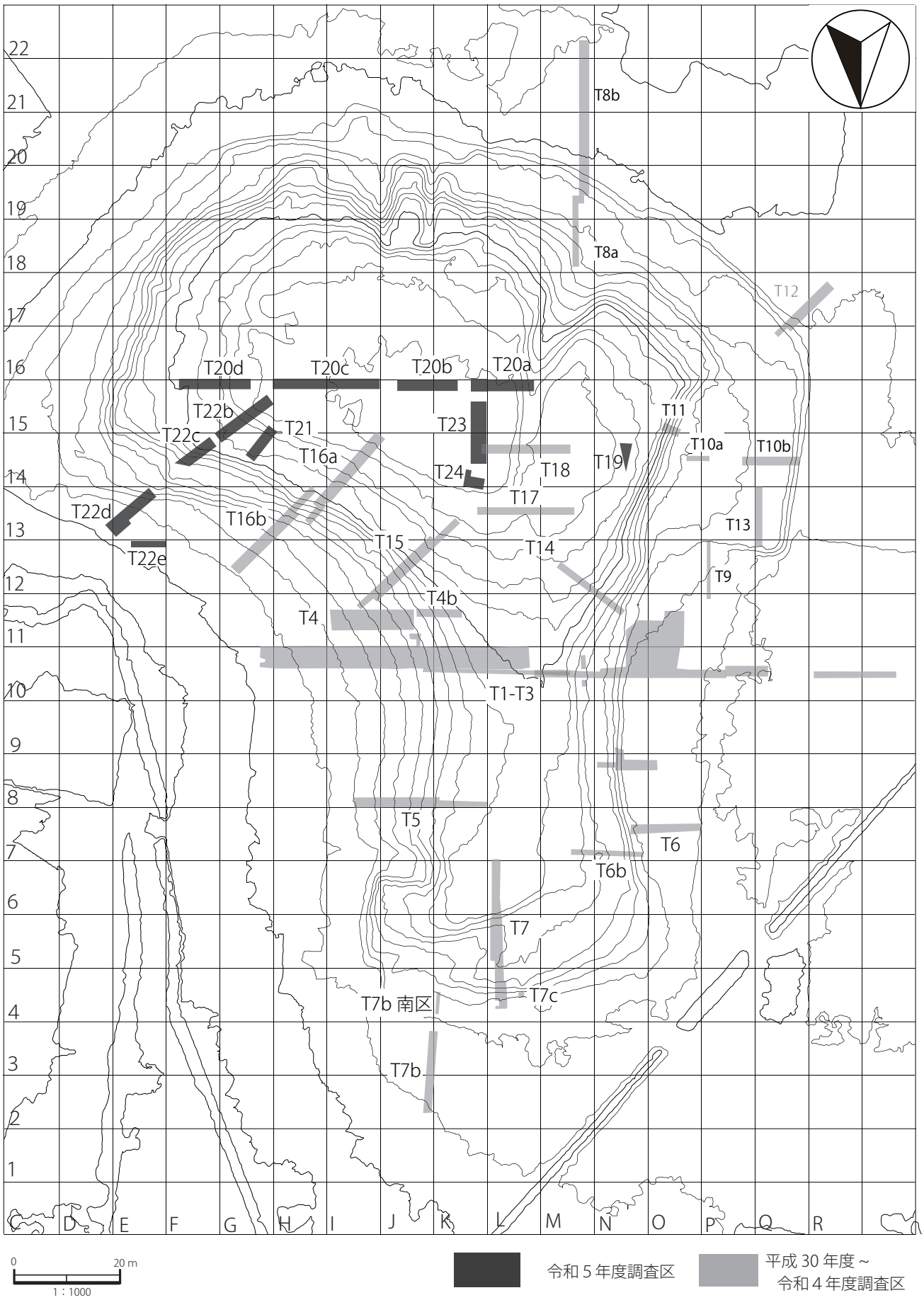
５月 10 日（水）　Ｔ 19 で竪穴住居ＳＴ２、Ｔ 20 ｃでＳＴ３・４を確認。Ｔ 20 ｃの遺構検出状況の写真撮影。Ｔ 20 ｃ出土遺物記録。

５月 11 日（木）　Ｔ 19 北側掘り下げ、ＳＴ２の北辺検出。ＳＴ４掘り下げ。Ｔ 22 ｂ掘り下げ開始。

５月 12 日（金）　Ｔ 19 の遺構検出状況の写真撮影。Ｔ 22 ｂ・ＳＴ４・ＳＴ２・ＳＴ３掘り下げ。ＳＴ４付近ピット検出状況の写真撮影。Ｔ 22 ｂ柱穴検出状況写真撮影。

５月 15 日（月）　雨天のため休み。

５月 16 日（火）　ＳＴ３掘り下げ。Ｔ 20 ｃピット等の遺構検出作業。Ｔ 22 ｂの柱穴の半裁・記録。ＳＴ４サブトレンチ掘り下げ。Ｔ 22 ｂ柱穴完掘し記録。



0　20 m
1：1000

令和５年度調査区

平成 30 年度～
令和４年度調査区

第 80 図　長岡南森遺跡平面図

5月17日（水）　ＳＴ３・ＳＴ４の精査と出土遺物記録・写真撮影。ピット検出写真撮影。山口社会教育課長、佐藤庄一氏視察。

5月18日（木）　ＳＴ３掘り下げ、ＳＴ４出土遺物写真撮影。Ｔ20ｃ拡張部掘り下げ。Ｔ22ｂ壁切り・壁面図化作業。ＳＴ４の床面の排土をフルイがけ。Ｔ21・ＳＴ２掘り下げ。

5月19日（金）　Ｔ20ｃの出土遺物写真撮影。ＳＴ４・ＳＴ５の切り合いの検討。ＳＴ５検出状況写真撮影。Ｔ19・Ｔ21掘り下げ。ＳＴ２遺物写真撮影。ＳＴ２の床面の排土をフルイがけ。

5月22日（月）　Ｔ20ｂ掘り下げ。ＳＴ３・ＳＴ５の遺物記録、取り上げ。Ｔ21面整理、柱穴確認。Ｔ22ｂ平面図作成。

5月23日（火）　ＳＴ２出土遺物記録。Ｔ20ｂ掘り下げ、ピット等検出。ＳＴ３出土遺物記録、ＳＴ５面整理。Ｔ21を南へ1ｍ拡張し溝検出・ＥＰ１～５半裁作業。Ｔ20ｄの周辺環境整備。

5月24日（水）　Ｔ19・Ｔ20ｂ面整理。Ｔ20ｃのＳＴ３出土遺物記録。ＳＴ４・ＳＴ５の面整理。Ｔ20ｄ掘り下げ。Ｔ21のＥＰ断面記録。Ｔ22ｃ・Ｔ22ｄ掘り下げ。

5月25日（木）　Ｔ19のＳＴ２面整理、ＳＫ等検出。Ｔ20ｂ面整理、ピット等検出。Ｔ20ｃのＳＴ３出土遺物記録、ＳＴ４・ＳＴ５の面整理。Ｔ20ｄ掘り下げ。Ｔ21のＥＰ断面記録。Ｔ22ｃ再掘り下げ。Ｔ22ｄ掘り下げ。

5月26日（金）　Ｔ19・Ｔ20ｂの遺構検出写真撮影。Ｔ20ｂ柱穴等半裁作業。Ｔ21のＥＰ断面記録、東壁記録作業。Ｔ22ｂコンタ図作成。Ｔ22ｃ・Ｔ22ｄ掘り下げ。

5月29日（月）　雨天につき作業員は休み。Ｔ20ｃのＳＴ３出土遺物記録、取り上げ。Ｔ21の壁記録作業。

5月30日（火）　ＳＴ２のＳＫ断面記録。Ｔ20ｂの壁切り。Ｔ20ｄ掘り下げ、遺構検出状況写真撮影。Ｔ21コンタ図作成。Ｔ22ｃ面整理。Ｔ22ｄ掘り下げ。

5月31日（水）　Ｔ20ｂの柱穴等断面記録。Ｔ20ｃのピット半裁・断面記録、ＳＴ３出土遺物記録、ＳＴ５精査、Ｔ20ｄの柱穴半裁・記録、ＳＤ12精査、壁記録作業。Ｔ22ｂのＳＰ３検出写真撮影。Ｔ22ｃ面整理。Ｔ22ｄのＳＤ13の検出写真撮影。Ｔ23設定、サブトレンチ掘り下げ。Ｔ24設定。

6月1日（木）　ＳＴ２遺構写真撮影。Ｔ20ｂのＳＰ完掘作業、平面図作成。ＳＴ３出土遺物取り上げおよび平面図作成。Ｔ20ｄのＳＰ完掘作業。Ｔ22ｂのＳＰ３断面図記録。Ｔ22ｃのＳＡ９、Ｔ22ｄのＳＤ13・ＳＸ３検出写真撮影。

6月2日（金）　雨天のため休み。

6月5日（月）　ＳＴ２の遺構写真撮影。Ｔ 20 ｂのＳＰ完掘作業、平面図作成。ＳＴ３出土遺物取り上げ、平面図作成。Ｔ 20 ｄのＳＰ完掘作業。Ｔ 22 ｂのＳＰ３断面図記録。Ｔ 22 ｃのＳＡ９写真撮影。Ｔ 22 ｄのＳＤ 13、ＳＸ３検出写真撮影。

6月6日（火）　Ｔ 20 ａ掘り下げ開始。Ｔ 22 ｃ壁面記録写真撮影。Ｔ 23 面整理。午前長岡南森遺跡確認調査委員会を実施、青木敬氏・佐藤庄一氏・山形県博物館・文化財活用課稲村圭一主査による現地指導。山形県埋蔵文化財センター植松暁彦氏視察。

6月7日（水）　Ｔ 19 平面図作成、壁面記録。Ｔ 20 ａ掘り下げ、面整理、ＳＴ６検出。ＳＴ３面整理。Ｔ 22 ｄにてＳＤ 13 の範囲確認。Ｔ 22 ｅ面整理。Ｔ 23 の遺構検出。

6月8日（木）　Ｔ 20 ａ検出作業、掘り下げ。Ｔ 20 ｃ平面図作成。Ｔ 22 ｄ拡張作業、面整理、壁面堆積の検討。

6月9日（金）　排水作業。午前長岡南森遺跡確認調査委員会を実施、菊地芳朗氏・北野博司氏による現地指導。Ｔ 20 ａを東に１ｍ拡張、写真撮影。ＳＴ３壁断面検討。Ｔ 20 ｄ、Ｔ 22 ｃのコンタ図作成準備作業。Ｔ 23 を南へ 1.5m 拡張、遺構検討。

6月 12 日（月）　Ｔ 20 ａサブトレンチ掘り下げ。Ｔ 20 ｂ、Ｔ 21 写真撮影。Ｔ 20 ｄサブトレンチ掘り下げ、平面図作成。Ｔ 22 ｃ平面図作成、写真撮影。Ｔ 23 面整理。

6月 13 日（火）　雨天のため休み。

6月 14 日（水）　雨天につき作業員は休み。午後から記録作業のみ行う。ＳＴ２壁記録。Ｔ 22 ｂの壁面検討、ＳＤ 14 検出。

6月 15 日（木）　午前南陽市文化財保護審議会による現地視察。Ｔ 20 ａサブトレンチ掘り下げ。ＳＴ３床面面整理。Ｔ 20 ｄのＳＤ 12 底面精査。Ｔ 23 面整理。

6月 16 日（金）　雨天のため休み。

6月 19 日（月）　佐藤庄一先生現地指導。Ｔ 20 ａ遺構検出作業。ＳＴ３～５の床面精査、ＳＴ３の遺構検出状況写真撮影。Ｔ 20 ｄのＳＤ 12 底面精査、遺物記録。Ｔ 23 遺構検出作業および検討。

6月 20 日（火）　ＳＴ２平面図修正作業。Ｔ 20 ｃ遺構・遺物の追加写真撮影、平面図修正作業。Ｔ 22 ｄのＳＤ 13 検出作業。Ｔ 23 遺構検出作業、ＳＴ６南東角検出。

6月 21 日（水）　Ｔ 20 ａ面整理。ＳＴ３のピット等半裁作業、断面図作成、遺物記録。Ｔ 20 ｃ・Ｔ 22 ｂの平面図修正。Ｔ 20 ｄ完掘写真撮影。Ｔ 23 木根除去、面整理。

6月 22 日（木）　Ｔ 20 ａ面整理、壁切り作業、サブトレンチ掘り下げ。Ｔ 20 ｃ柱穴半

裁写真撮影。Ｔ 22 ｄ平面図作成。Ｔ 23 面整理、遺構検討。Ｔ 24 設定。

6 月 23 日（金）　Ｔ 20 ａ遺構検出写真撮影。Ｔ 20 ｃのＥＰ写真撮影後に完掘作業、掘り下げ、排土のフルイがけ。Ｔ 20 ｄの壁記録。Ｔ 22 ｄ写真撮影。Ｔ 24 サブトレンチ掘り下げ。

6 月 26 日（月）　Ｔ 20 ａ壁記録。Ｔ 23 のＳＤ 15 一部掘り下げ、杉根土除去。Ｔ 24 掘り下げ。

6 月 27 日（火）　午前長岡南森遺跡確認調査委員会実施。青木敬氏・佐藤庄一氏による現地指導。午後は雨天のため休み。

6 月 28 日（水）　排水作業。文化庁文化財第二課　大澤正吾文化財調査官現地視察。山形県博物館・文化財活用課　稲村圭一主査・佐藤庄一氏（午前のみ）同行。午後３時から沖郷公民館で協議。

6 月 29 日（木）　排水作業。ＳＴ６西半掘り下げ、壁記録、ＳＴ６遺物図化・写真撮影。Ｔ 22 ｂ壁土層再検討、図修正。Ｔ 23、Ｔ 24 泥除去、面整理。

6 月 30 日（金）　排水作業。午前中長岡南森遺跡確認調査委員会を実施、菊地芳朗氏・北野博司氏現地指導。午後は雨天のため休み。

7 月 3 日（月）　排水作業。大澤文化財調査官、長岡南森遺跡確認調査委員会の指導に基づき調査。Ｔ 20 ａ、Ｔ 20 ｄのサブトレンチ掘り下げ。ＳＴ６出土遺物記録、写真撮影。Ｔ 22 ｂの西壁土層断面再検討。Ｔ 23 のＳＤ 15 一部掘り下げ、ベルトサブトレ掘り下げ。吉野一郎氏視察。

7 月 4 日（火）　Ｔ 20 ａのサブトレンチ掘り下げ、面整理、壁記録、出土遺物取り上げ。Ｔ 20 ｄサブトレンチ掘り下げ、壁追加記録。Ｔ 22 ｂ壁面写真撮影。Ｔ 23 ベルトサブトレンチ掘り下げ。Ｔ 24 拡張し掘り下げ。

7 月 5 日（水）　Ｔ 20 ａ面整理。Ｔ 22 ｄ壁記録。壁面写真等の撮影。完掘写真再撮影。

7 月 6 日（木）　Ｔ 19、Ｔ 23 の清掃、面整理。Ｔ 19 完掘写真撮影。Ｔ 20 ａのサブトレンチ掘り下げ、壁面記録、平面図作成。

7 月 7 日（金）　ＳＴ６面整理、壁面と遺構検出状況写真撮影。Ｔ 20 ｃ床面精査。Ｔ 22 ｄの壁面、遺構写真撮影。Ｔ 22 ｅ壁面写真撮影。Ｔ 23 遺物取り上げ、平面図作成。阿部明彦氏視察。

7 月 10 日（月）　Ｔ 20 ｃ壁面検討、壁面記録。Ｔ 23 平面図作成、壁面・ベルト記録、写真撮影。Ｔ 24 平面図作成。

7 月 11 日（火）　現地説明会準備（全体清掃、通路の整備）。Ｔ 20 ａ壁面記録、ベルト記録。Ｔ 23 壁記録。

7 月 12 日（水）　全体清掃。Ｔ 20 ｃ・Ｔ 23 壁面記録。午後現地説明会を開催。午後３時半赤湯地区長会現地視察。撤収にむけ準備。

7 月 13 日（木）　Ｔ 20 ｃ清掃、写真撮影、壁面記録。Ｔ 24 壁記録。テント・資材撤収作業。東北学院大学辻秀人氏、県埋文センター植松暁彦氏視察。

7月14日（金）　　Ｔ 20 ａの杭跡等写真撮影。Ｔ 20 ｃ壁面記録、資材撤収作業。
7月19日（水）　　Ｔ 20 ｃ壁図面等確認作業。仮設トイレ撤去。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

南陽市は山形県南部の米沢盆地北東部にあたり、北緯 38° 1 ’11” ～ 38° 13’25”、東経 140° 14’11” ～ 140° 14’17” に位置する。市域の南北の長さは約 22.6km、東西は約 14.8㎞で、面積は約 160.70k㎡である。北部の白鷹山系の丘陵が南陽市の面積の 70％を占め、南部の盆地が 30％である。長岡南森遺跡がある南部では吉野川によって形成された宮内扇状地とその東に大谷地が広がる。その吉野川は白鷹山麓を水源として宮内地区を経て沖郷地区から赤湯地区を南へ流れ屋代川へ、そして最上川に合流する。

長岡南森遺跡はＪＲ赤湯駅から南東約 1.2km 、国指定史跡稲荷森古墳の南東約 130 mに位置する。遺跡の東には国道 399 号線が通り、遺跡と国道の間に長岡地区の集落が広がる。丘陵北半部は主に果樹園や畑地として利用されていたが近年休耕地が増加している。丘陵南半部は林である。集落の薪山として利用され、林の中に失止八幡宮と神明神社ほか近世墓地がある。寛政九（1797）年絵図（米沢市立図書館蔵）には森が描かれ、そこに「八幡」「神明」と書かれている。近年は南森丘陵に隣接する地区の宅地化が進んでいる。

第２節　周辺の歴史的環境

長岡南森遺跡周辺は長い歴史の中で人々に豊かな自然の恵みを与えた大谷地に面した洪積世の台地の一部であり、これらの地域ではその生活の様子がうかがえる遺跡が確認されている。

縄文時代の遺跡は良好な狩猟場であった大谷地周辺に多く分布し、中でも長岡南森遺跡から東側 1.5㎞に低湿地の集落跡である押出遺跡（高畠町）が確認されている。また隣接する長岡山遺跡・長岡山東遺跡からも中期の土器や石器がまとまって出土している（2013 山田・吉田）。

弥生時代の遺跡としては、中期の墓跡や特徴的な文様を持つ土器が確認された百刈田遺跡（2010 髙桑・佐藤）や、石包丁が発見された萩生田遺跡がある。

古墳時代の遺跡では、長岡南森遺跡に隣接する全長 96 mの前方後円墳である稲荷森古墳がある。また蒲生田古墳群や、長岡山遺跡・大塚遺跡・清水上遺跡で方形周溝墓（古墳）群が確認されている。また沢田遺跡周辺では中期の集落が確認されている（2013 吉田）。

古代の遺跡では、南森丘陵の北西約 600 mに位置する矢ノ目館跡からは条里制の痕跡の可能性がある道路跡が（1984 吉野）、隣接する長岡山遺跡からは円面硯や墨書土器などの遺物が出土している。また唐越遺跡では掘立柱建物跡群や柵列・溝跡など区画を意識した遺構が確認され（2016 吉田）、沢田遺跡を中心とする郡山遺跡群では集落跡の広がりがみられる（2013 吉田）。

中世の遺跡では、長岡山丘陵上に湯野目氏が居住したと伝わる長岡館跡があり、南森丘陵の

南には内城館跡、鵜ノ木館跡がある。

Ⅲ　調査の概要

第１節　現況の把握

第３次（令和２年）まで確認調査を行った丘陵北半部は南北約 75 m・東西約 50 mと南北を長辺とするほぼ方形である。頂部は概ね平坦で、西側斜面には幅５m前後の帯状段がある。東側は昭和 40 年頃までぶどう畑として利用された緩斜面で段は失われた。昭和 40 年代に重機で斜面の改変したことと丘陵東側斜面の一部に段が残っていたとの地権者からの証言がある。トレンチ調査から丘陵北半部に三段の段状地形が確認された。

第４次（令和３年）以降確認調査を行った南半部は東西約 131 m・南北約 78 m東西を長辺とする隅丸方形である。頂部は概ね平坦で神明神社と八幡神社が祀られている。堀切状の溝とその東には土塁状の地形が、また南斜面近くには古墓地がある。南斜面には太平洋戦争時の防空壕跡といわれる痕跡がある。丘陵の南～東側に「清水尻」地区があるが明治期に溜池が存在していた。

第２節　第 19 トレンチ（Ｔ 19）（第 81 図）

Ｔ 19 はＮ 14 グリットに幅 3.5m ×長さ８ mのトレンチとして設定した。西半が崖のため調査区は限定された。調査面積は 13.2㎡である。

（１）遺構

竪穴住居跡１棟（ＳＴ２）を確認した。西側は昭和期の切土で失われており、遺構の断面が崖面に現れていた。形状はやや不整形とみられ、南北４m・東西の確認できた部分は 2.5 m である。壁面は緩やかに傾斜して立ち上がる。主軸方向はＮ－ 70°－Ｅである。南西角に一部階段状の施設がある。カマドなどの炉跡は確認できなかった。ＳＴ２の床面で柱穴３基（ＥＰ１・２・３）、土坑１基（ＥＫ 10）を検出した。堆積土はいずれも自然堆積とみられる。

（２）遺物の出土状況

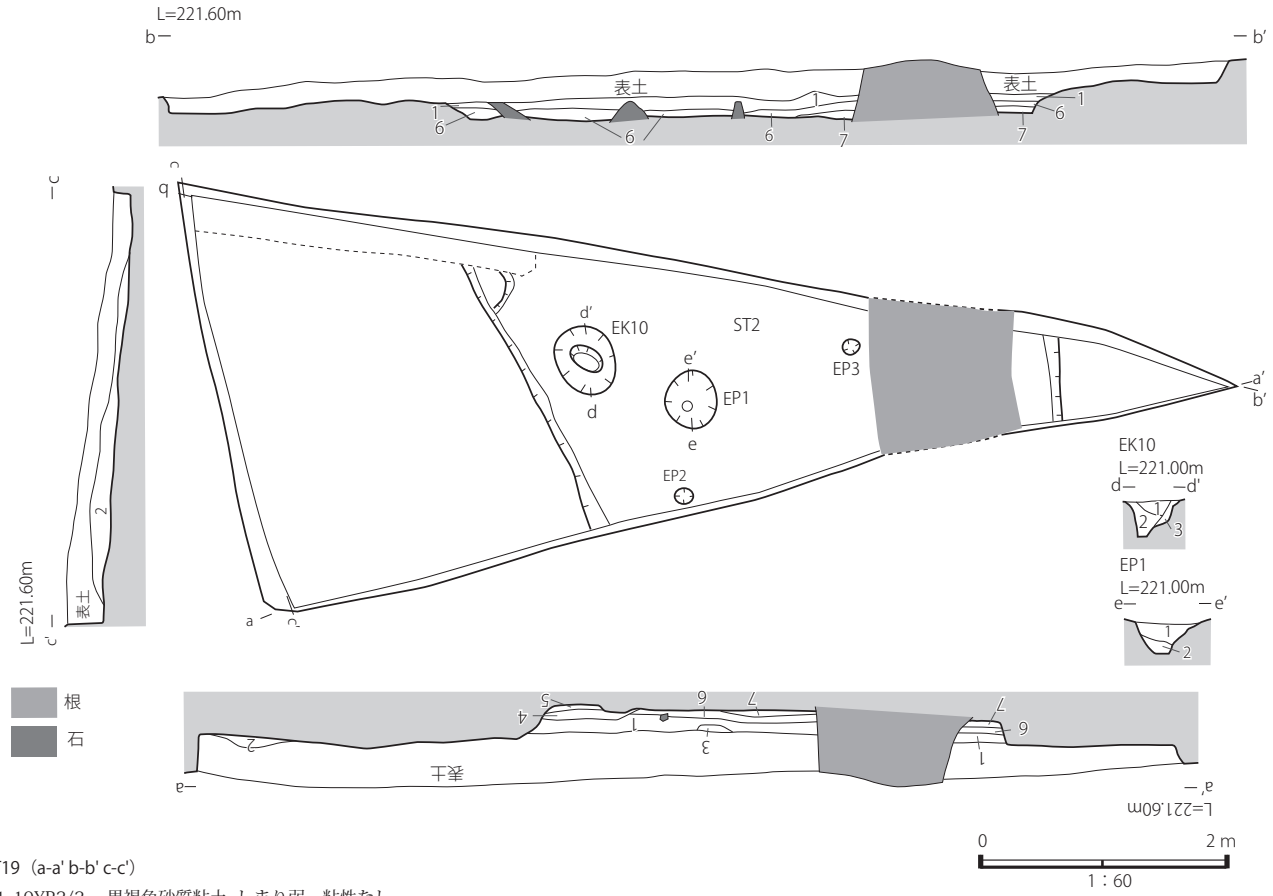
遺物は竪穴住居内から床面から土師器、砥石や敲石など石製品３点が出土した。

第３節　20 ａトレンチ（Ｔ 20 ａ）（第 82 図）

Ｔ 20 ａはＬ 15 ～Ｋ 15 グリッドに幅 1.5m ×長さ 10.8 mのトレンチとして設定した。調査面積は 16.2㎡である。

（１）遺構

Ｔ 20 ａでは竪穴住居１棟（ＳＴ６）・溝１本（ＳＤ 15）・土坑２基（ＳＫ 15・21）ピット４基（ＥＰ２・３・４・５）を確認した。ＳＤ 10 は第５次調査の際Ｔ 18 で確認された遺構で、それに続くものとみられる（角田 2023）。また整地を行ったとみられる範囲（土塁状遺構）があった。



T19（a-a' b-b' c-c'）
1.10YR2/2　黒褐色砂質粘土 しまり弱　粘性なし
2.10YR3/3　暗褐色砂質粘土 しまる　粘性なし
3.10YR4/4　オリーブ褐色シルト粘土 しまる　粘性弱
4.10YR2/2　黒褐色シルト粘土 しまり弱　粘性弱
5.10YR2/1　黒色シルト粘土 しまる　粘性弱
6.10YR2/1　黒色砂質粘土 しまり弱　粘性弱
7.10YR2/2　黒褐色シルト粘土 しまり弱　粘性なし
10YR3/4 粘土少量混入

EK10（d-d'）
1.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性弱
2.10YR2/3　黒褐色シルト粘土　しまり弱　粘性弱
3.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性弱

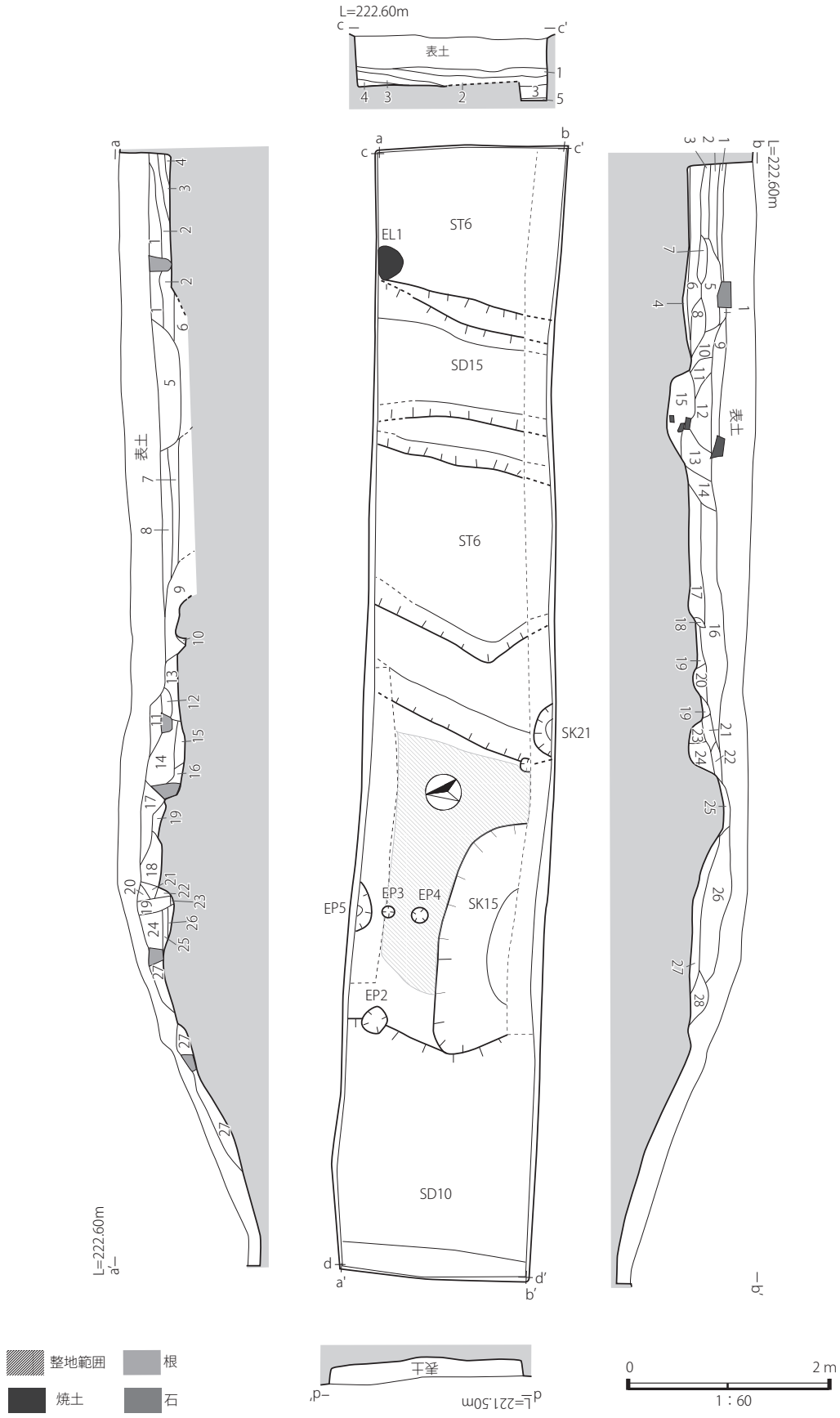
EP1（e-e'）
1.10YR2/2　黒褐色シルト粘土　しまり弱　粘性弱
2.10YR2/3　黒褐色シルト粘土　しまり弱　粘性弱

第 81 図　Ｔ 19 トレンチ

ＳＴ６では遺構の立ち上がりを確認できたのは西辺のみであったが、形状は方形、１辺６m以上で、遺構の方向はＮ－35°－Ｅであろうか。遺構の壁は緩やかに傾斜して立ち上がる。地床炉とみられる焼土（ＥＬ１）を壁面から東に４mほど離れたところに確認した。壁面に沿って幅約 50cm・床面からの高さ約 10㎝のベッド状遺構とみられる施設を検出した。ベッド状遺構のある竪穴住居跡は山形県内では山形市・梅ノ木前遺跡（2007 伊藤）で３棟確認されている。ＳＴ南西端に土坑ＳＫ 21 が検出されたがこれはＳＴ６に伴う遺構とみられる。ＳＴ６内を南北方向に走るＳＤ 15 であるが、トレンチ土層断面からＳＤ 15 はＳＴ６が埋没した後に造られたことがわかる。またＳＴ６と地業範囲の新旧関係は不明である。堆積層は概ね３層に分かれいずれも自然堆積である。なおＳＴ６は遺構保存のためサブトレンチを除き床面直上までの掘り下げは行わなかった。

ＳＫ 15 は浅いレンズ状の遺構であるが覆土から土師器が出土している。

ＥＰ２・３・４・５について、５はトレンチ壁面で断面は確認できたものの、２・３・４は遺構保存のため掘下げを行わなかった。ＥＰ５は整地層より新しいと思われる。



第 82 図　T 20 a トレンチ

T20a

a-a'

1.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまる
2.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまる　10YR4/4 褐色粘土少量混入
3.10YR1.7/1　黒色砂質粘土　粘性弱　ややしまる
4.10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性弱　ややしまる
5.10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性なし　しまり弱　須恵器混入
6.10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性中　しまり弱
7.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性なし　しまる
8.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまり弱　土師器混入
9.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性あり　しまる
10.7.5YR4/4　褐色砂質粘土　粘性中　しまり弱　10YR2/3 粘土混入
11.10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性弱　しまる
12.10YR3/3　暗褐色砂質粘土　粘性強　しまる
13.10YR3/2　黒褐色シルト粘土　粘性中　しまり弱
14.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまる
15.10YR3/4　暗褐色砂質粘土　粘性弱　しまり弱　10YR2/2 粘土混入
16.10YR5/6　黄褐色砂質粘土　粘性弱　しまり弱
17.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性あり　しまる
18.10YR3/4　暗褐色砂質粘土　粘性あり　しまる
19.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性なし　しまり弱
20.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまる
21.10YR3/2　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまる
22.10YR4/3　にぶい黄褐色砂質粘土　粘性弱　しまる
23.10YR2/2　黒褐色シルト粘土　粘性あり　しまり弱
24.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性なし　しまる
25.10YR3/3　暗褐色砂質粘土　粘性中　しまる
26.10YR3/4　暗褐色砂質粘土　粘性強　しまり弱
27.10YR3/3　褐色砂質粘土　粘性あり　しまり弱

b-b'

1.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまる
2.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまる　10YR4/4 褐色粘土少料混入
3.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまる　10YR4/4 褐色粘土多く混入
4.10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性あり　しまり弱　土師器混入
5.10YR4/4　褐色砂質粘土　粘性あり　しまり弱　10YR2/3 粘土混入
6.7.5YR5/4　にぶい褐色砂質粘土　粘性あり　しまる　10YR3/2 粘土混入
ST6 の貼床
7.10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性弱　しまり弱　礫多く混入
8.10YR1.7/1　黒色砂質粘土　粘性弱　ややしまる
9.10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性弱　ややしまる　須恵器片混入
10.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまり弱
10YR2/3　黒褐色粘土多く混入
11.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性あり　しまり弱
10YR4/4 粘土まだらに混入
12.10YR3/3　暗褐色砂質粘土　粘性なし　しまる
13.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性なし　しまり弱
14.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性なし　しまり弱　土師器多量混入
15.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性なし　しまる　粗砂５％　混入
16.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまる　混入
17.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまり弱　土師器含混入
18.10YR3/2　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまり弱
19.10YR4/6　褐色砂質粘土　粘性あり　しまる　10YR2/3 粘土混入
20.10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性あり　しまり弱
21.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性中　しまり弱
22.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性弱　ややしまる
23.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性あり　しまり弱
24.10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性中　しまり弱
25.10YR1.7/1　黒色砂質粘土　粘性なし　ややしまる
26.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまる
27 10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性中　しまり弱
28.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性あり　しまり弱

c-c'

1.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまる
2.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまる　10YR4/4 褐色粘土少量混入
3.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまる　10YR4/4 褐色粘土多く混入
4.10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性あり　しまりあり
5.10YR1.7/1　黒色砂質粘土　粘性あり　しまり弱

（２）遺物

ＳＫ 15 から棒状浮文の加飾がある壺の口縁部が出土した。ＳＴ６サブトレンチ貼床層からは土師器の甕あるいは壺の破片が、ベッド状遺構の貼床覆土内から土師器が出土した。

第４節　第 20 ｂトレンチ（Ｔ 20 ｂ）（第 83 図）

Ｔ 20 ｂはＫ 15 ～Ｊ 15 グリットに幅 2.1 ｍ×長さ 11.8 ｍのトレンチとして設定した。調査面積は 24.78㎡である。

（１）遺構

浅い土坑１基 (ＳＫ 11）およびピット 12 基（ＳＰ１～ 12）を検出した。

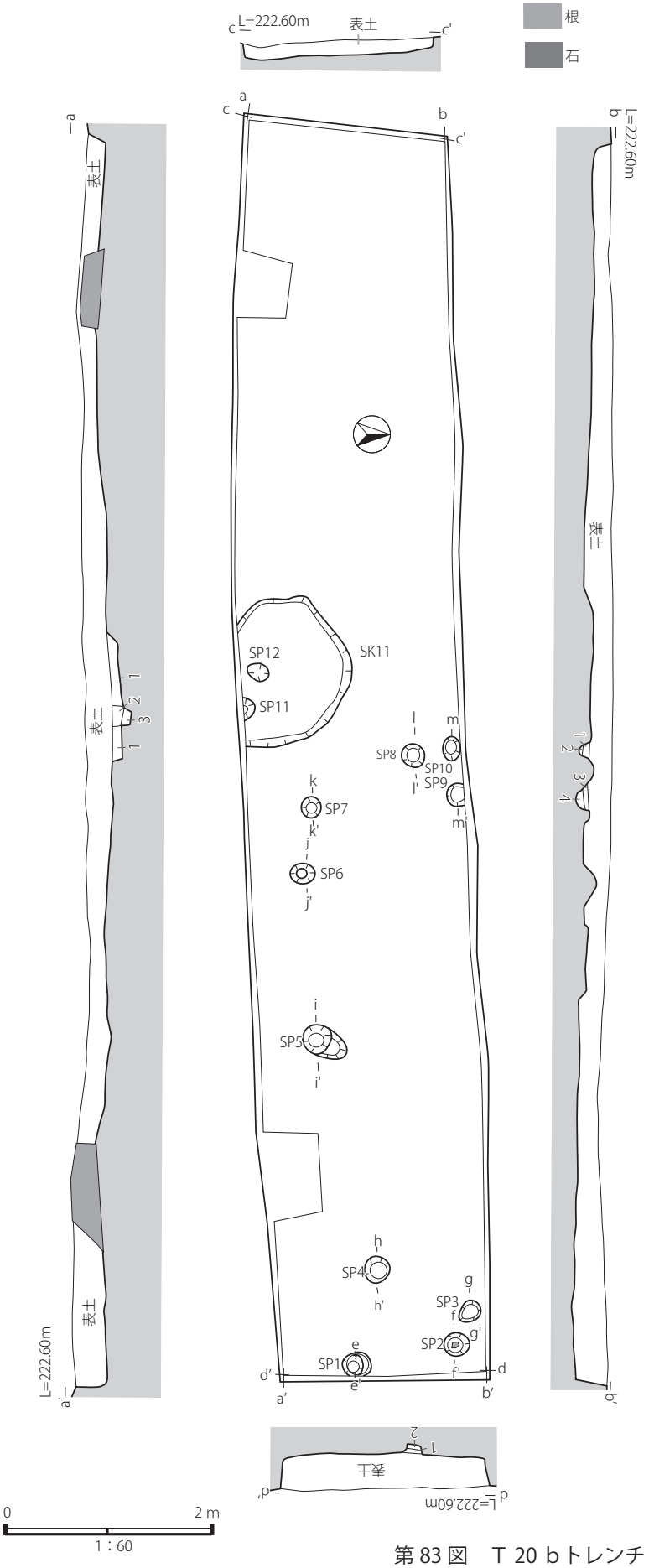
（２）遺物の出土状況

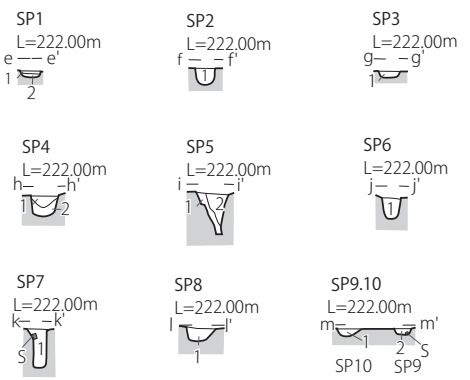
表土層から土師器片が若干出土した。

第５節　第 20 ｃトレンチ（Ｔ 20 ｃ）（第 84 図）

Ｔ 20 ｃはＩ 15 ～Ｈ 15 グリットに幅２ｍ×長さ 19.8 ｍのトレンチとして設定した。調査面積は 39.6㎡である。

（１）遺構





T20b

a-a'

1.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　硬くしまる　粘性なし
1cm の礫少量混入
2.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　ややしまる　粘性弱
3.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　ややしまる　粘性弱

b-b'

1.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　しまる　粘性弱
2.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　しまる　粘性弱
3.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　硬くしまる　粘性なし
1cm の礫少量混入
4.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　ややしまる　粘性弱

d-d'

1.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性弱
2.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性弱

SP1(e-e')

1.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　しまりなし　粘性弱
2.10YR2/3　黒褐色シルト粘土　しまり弱　粘性弱

SP2(f-f')

1.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性弱

SP3(g-g')

1.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性弱

SP4(h-h')

1.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性弱
2.10YR2/1　黒色砂質粘土　しまり弱　粘性弱　粗砂混入

SP5(i-i')

1.10YR2/2　黒褐色シルト粘土　しまりなし　粘性弱
2.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性弱　粗砂混入

SP6(j-j')

1.10YR2/2　黒褐色シルト粘土　しまりなし　粘性弱

SP7(k-k')

1.10YR2/2　黒褐色シルト粘土　しまりなし　粘性弱

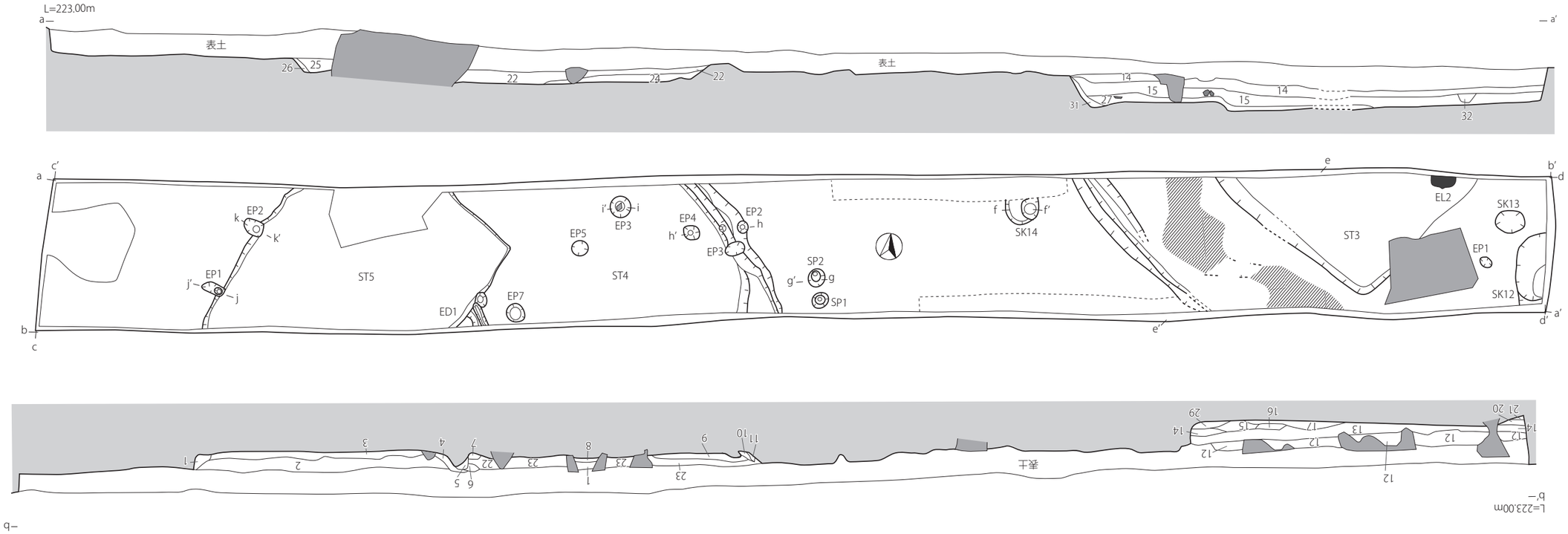
SP8(l-l')

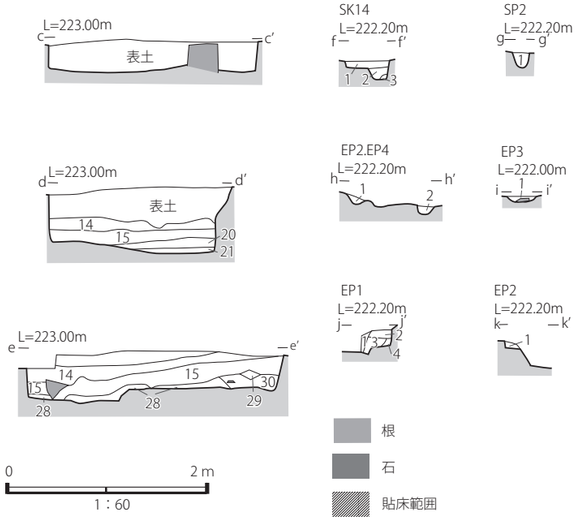
1.10YR2/1　黒色砂質粘土　しまり弱　粘性弱　粗砂混入

SP9.10(m-m')

1.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性弱
2.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性弱

第 83 図　T 20 b トレンチ





T20c（a-a'　b-b'　c-c'　d-d'　e-e'）

1.10YR3/2　黒褐色砂質粘土　粘性中　しまり弱 1s0YR5/6 黄褐色粘土ブロックで混入
2.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまり中　0.2 ～ 20㎝礫３％混入 土師器混入
3.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性中　しまり中　0.3㎝の礫２％混入 土師器混入
4.10YR3/2　黒褐色砂質粘土　粘性中　しまり中 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロック混入
5.7.5YR2/1　黒色砂質粘土　粘性中　しまり弱 10YR4/4 褐色粘土ブロック混入
6.7.5YR3/1　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまり弱　10YR5/4 にぶい黄褐色砂質粘土混入
7.10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性中　しまり弱
8.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性中　しまりやや中　10YR4/2 灰黄褐色土少量混入
9.7.5YR2/1　黒褐色砂質粘土　粘性中　しまり弱　0.1 ～ 0.5㎝礫３％混入
10.10YR2/1　黒褐色砂質粘土　粘性中　しまり弱壁
11.10YR4/3　にぶい黄褐色　粘土粘性強　しまり弱　10YR2/2 黒褐色粘土混入
12.10YR1.7/1　黒色砂質粘土　粘性弱　しまり弱　0.1㎝以下の粗砂１％混入 土師器混入
13. 10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性やや強　しまり中 0.2 ～ 2㎝礫３％混入 土師器混入
14.10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性弱　しまり弱
15.10YR3/2　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまり弱　7.5YR4/3 褐色砂質粘土ブロック混入　土師器混入　0.1㎝の粗砂２％混入
16.7.5YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまりなし
17.10YR3/2　黒褐色砂質粘土　粘性中　しまり弱　土師器片混入
18. 10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまり弱　0.1 ～ 1㎝粗砂２％混入
19. 7.5YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性中　しまり中　0.1 ～ 2㎝粗砂１％混入
20. 10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまり中　0.1 ～ 1㎝の粗砂３％混入
21. 7.5YR2/1　黒色砂質粘土　粘性中　しまり弱
22. 10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性中　しまり中　土師器片混入 0.1 ～ 0.5㎝粗砂３％混入
23. 10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性中　しまり中　10YR4/3 にぶい黄褐色土少量混入　0.1 ～ 5㎝粗砂・礫３％混入
24. 10YR3/2　黒褐色砂質粘土　粘性中　しまり弱　10YR6/6 明黄褐色粘土ブロックで混入
25. 7.5YR1.7/1　黒色砂質粘土　粘性大　しまりなし　土師器片混入
26. 7.5YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまりなし　土師器片混入 7.5YR5/6 明褐色砂質粘土　10YR4/6 褐色砂質粘土ブロックで混入
27. 10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性中　しまり中
28. 10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性中　しまり中　0.1 ～ 0.5㎝の粗砂３％混入
29. 10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまり弱　10YR5/6 黄褐色粘土混入
30. 10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性中　しまりなし
31. 10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性中　しまり弱
32. 10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性中　しまり中　0.2 ～ 0.5㎝の粗砂２％混入

SK14(f-f')

1.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性なし　しまり弱
2.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまり弱
3.10YR3/4　暗褐色砂質粘土　粘性弱　しまり弱

SP2(g-g')

1.10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性あり　しまりあり

EP2.EP4(h-h')

1.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性なし　しまり弱
2.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまり弱

EP3(i-i)

1.10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性あり　しまりあり

EP1(j-j)

1.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまり弱
2.10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性弱　しまり弱
3.10YR3/3　暗褐色砂質粘土　粘性弱　しまり弱
4.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性なし　しまり弱　10YR3/3 暗褐色砂質粘土混入

EP2(k-k')

1.10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性弱　しまり弱

第 84 図　Ｔ 20 ｃトレンチ

Ｔ 20 ｃでは竪穴住居跡とみられる遺構を３基（ＳＴ３・４・５）検出したが、トレンチ調査のため遺構全体の様相は不明である。ＳＴ４とＳＴ５は遺構が重複している。なおＳＴ４とＳＴ５の新旧関係は木の根の撹乱により土層断面でとらえることはできなかった。

ＳＴ３は方形とみられＮ－50°－Ｗを向く。規模は両端が検出されていないので不明である。壁は床面からやや外側に傾斜して立ち上がり、壁沿いに幅 20 ～ 30㎝・深さ 5㎝程度の溝が一部に確認できる。壁面に沿って高さ 10㎝×幅 1.4m のベッド状遺構と思われる施設を南西・南東辺で確認したが、その直上では幅 40 ～ 70㎝の赤褐色土の堆積がある。地床炉とみられる焼土（ＥＬ２）をトレンチ北側で検出した。東壁で柱穴３基、土坑２基を検出した。堆積土は３層でいずれも自然堆積とみられる。

ＳＴ４は方形とみられ、規模は東西は 2.8 ｍ・南北は不明でＮ－ 42°－Ｗを向く。遺構の西辺はＳＴ５に掘り込まれている。壁の立ち上がりは緩く外側に傾斜し、壁に沿って幅 10 ～ 20㎝程度の溝が一部に確認された。炉跡は確認出来なかった。柱穴４基を検出した。堆積土は２層でいずれも自然堆積とみられる。

ＳＴ５は方形とみられ、南北軸は 3.7 ｍ・東西軸は不明で、方向軸はＮ－ 35°－Ｅである。壁の立ち上がりは外側に傾斜している。炉跡は確認できなかった。西辺壁に柱穴２基を検出した。堆積土は２層でいずれも自然堆積とみられる。出土遺物は床面で土師器等が出土した。

（３）遺物の出土状況

ＳＴ４の床面では土師器が出土が、覆土からは敲石と磨製石刀などが出土した。

ＳＴ５の床面で土師器等が出土した。

ＳＴ６の床面等から土師器と炭化物が出土した。

第６節　第 20 ｄトレンチ（Ｔ 20 ｄ）（第 85・86 図）

Ｔ 20 ｄはＧ 15 ～Ｆ 15 グリット、幅 2.3m ×長さ 12.1 ｍのトレンチとして設定した。調査面積は 27.83㎡である。

（１）遺構

柱穴５基（ＳＰ１・２・３・４・５）溝跡（ＳＤ 12）を検出した。柱穴５基は互い違いになりながらもＳＤ 12 と並行するように並んでいる。

（２）遺物の出土状況

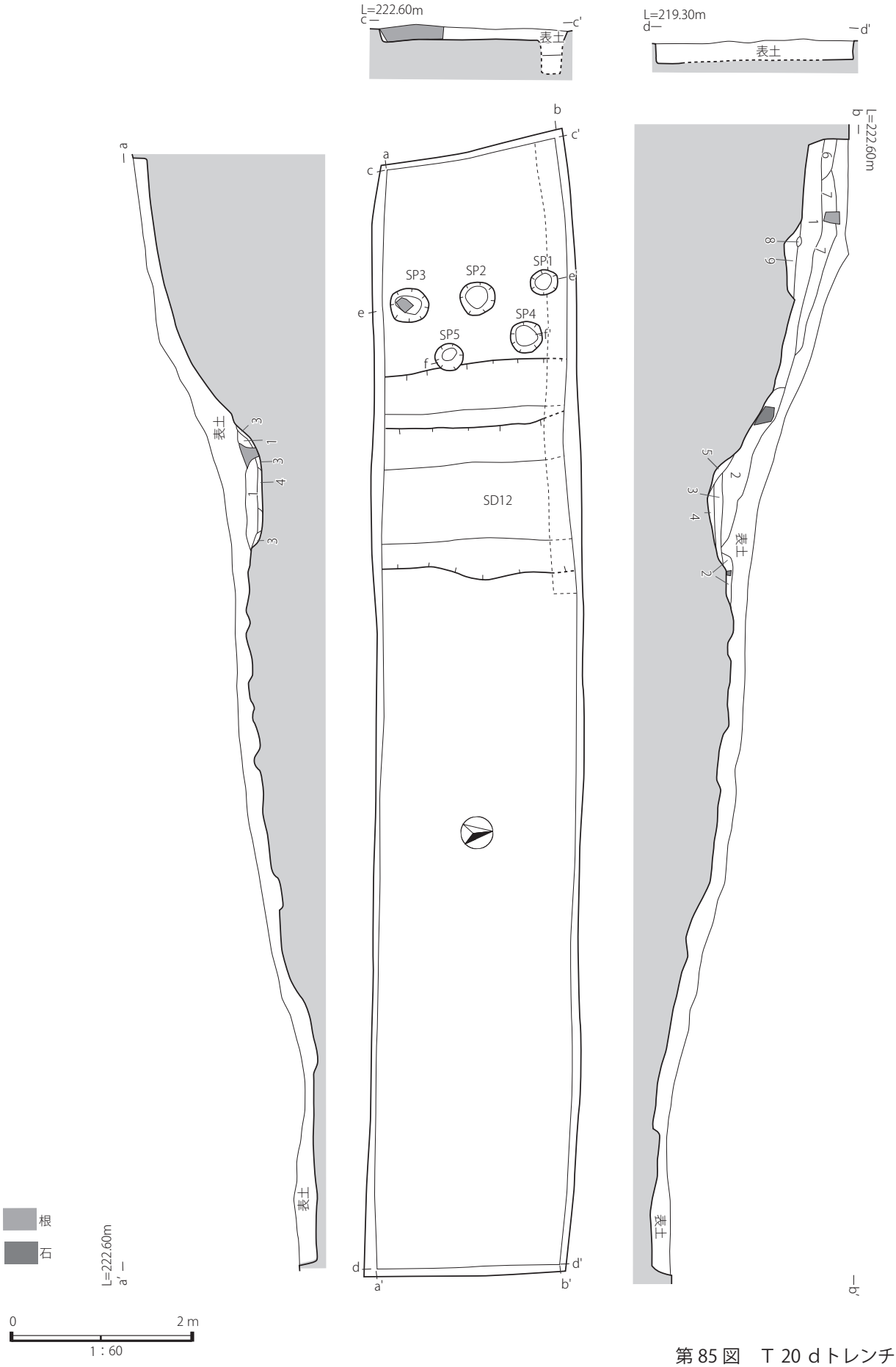
ＳＤ 12 覆土から石器や古代の土師器が出土した。

第７節　第 21 トレンチ（Ｔ 21）（第 87 図）

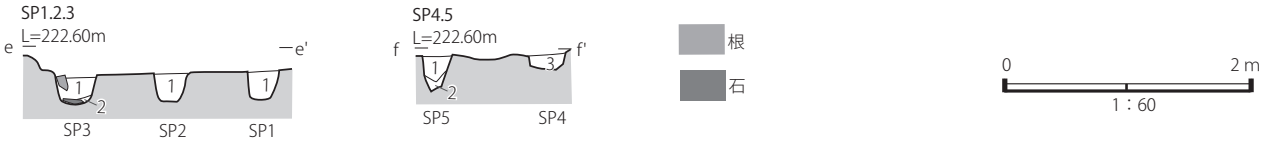
Ｔ 21 はＨ 14 ～Ｇ 14 グリット、幅 2.2m ×長さ９ｍのトレンチとして設定した。調査面積は 19.8㎡である。

（２）遺構

トレンチ北側で溝跡（ＳＤ 11）、柱穴跡（ＳＰ６・７・８・９・10・11）を検出した。また狭い範囲で整地層と礫の混入が見られた（土塁状遺構か）。またトレンチ中央で溝跡に柱穴（Ｅ



第 85 図　T 20 d トレンチ（1）



第 86 図　Ｔ 20 ｄトレンチ（２）

T20b

a-a'

1.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　ややしまる　粘性なし　直径 3㎝礫混入
2.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　しまる　粘性弱
3.10YR3/3　暗褐色砂質粘土　ややしまる　粘性なし
　直径２～５㎝礫含混入
4.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　ややしまる　粘性弱

b-b'

1.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　ややしまる　粘性なし
2.10YR3/2　黒褐色砂質粘土　ややしまる　粘性なし　直径３～5㎝礫混入
3.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　ややしまる　粘性なし　直径 10㎝礫混入
4.10YR3/3　暗褐色砂質粘土　ややしまる　粘性なし　直径２～５㎜礫混入
5.10YR3/2　黒褐色砂質粘土　ややしまる　粘性有
6.10YR3/3　暗褐色砂質粘土　しまる　粘性弱　直径 1㎝礫混入
7.10YR3/2　黒褐色砂質粘土　ややしまる　粘性弱
8.10YR4/3　にぶい黄褐色砂質粘土しまり弱　粘性弱
9.10YR1.7/1　黒色砂質粘土しまり弱　粘性弱

SP1.2.3(e-e')

1.10YR2/1　黒色砂質粘土　しまる　粘性なし
2.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　しまる　粘性なし

.

SP4.5(f-f')

1.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性弱
2.10YR3/3　暗褐色砂質粘土　しまる　粘性なし
3.10YR2/1　黒色砂質粘土　しまる　粘性なし

Ｐ１・２・３・４・５・13）が連なる遺構を確認し、これは布掘りを伴う柵列と思われる（ＳＡ 1）。

（３）遺物の出土状況

ＳＰ４覆土から土師器片が出土した。

第８節　第 22 ｂトレンチ（Ｔ 22 ｂ）（第 88 図）

Ｔ 22 ｂはＧ 14 ～Ｇ 15 に幅 1.5m ×長さ 11.6 ｍのトレンチとして設定した。調査面積は 17.4㎡である。

（１）遺構

竪穴住居跡（ＳＴ３）の一部とみられる遺構、溝跡（ＳＤ 14）、柱穴（ＥＰ２・３・４）を検出した。ＳＴ３はＮ－ 50°－Ｗを向き、Ｔ 20 ｃのＳＴ３と遺構の角度や位置関係から同じ遺構の可能性があるためこの竪穴住居跡もＳＴ３とした。壁は床面からやや外側に傾斜して立ち上がり、壁沿いに走る溝は確認できなかった。堆積土は自然堆積とみられる。壁際には柱穴が２基（ＥＰ２・３）確認された。

（２）遺物の出土状況

遺構から出土した遺物はなかった。

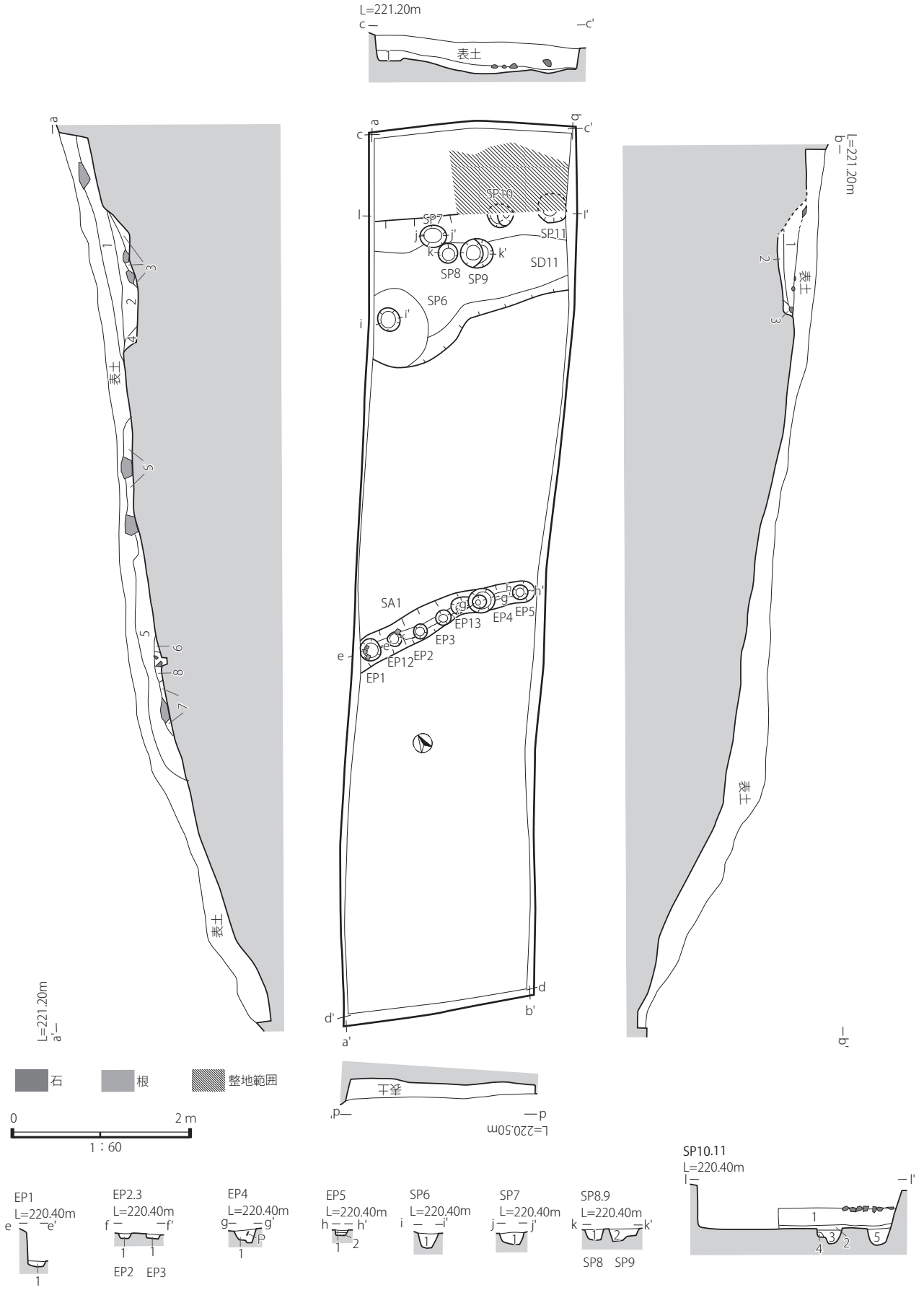
第９節　第 22 ｃトレンチ（Ｔ 22 ｃ）（第 89 図）

Ｔ 22 ｃはＦ 14 グリットに幅 1.4m ×長さ 7.1 ｍのトレンチとして設定した。調査面積は 9.94㎡である。

（１）遺構

溝跡に柱穴（ＥＰ１・２・３・４・５）が連なる遺構を確認し、これは布掘りを伴う柵列（ＳＡ９）と思われる。

（２）遺物の出土状況



第 87 図　T 21 トレンチ

T21
a-a'　c-c'
1.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　しまりなし　粘性なし　礫多く混入
2.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性弱　土師器混入
3.10YR3/3　暗褐色シルト粘土　　しまり弱　粘性あり
4.10YR3/2　黒褐色シルト粘土　　しまり弱　粘性弱
5.10YR3/3　暗褐色砂質粘土　　しまりあり　粘性あり
6.10YR2/1　黒色砂質粘土　　しまりなし　粘性弱　直径２～５㎝礫混入
7.10Y2/2　黒褐色砂質粘土　　しまる　粘性弱
8.10YR1.7/1　黒色シルト粘土　　しまりなし　粘性弱

b-b'
1.10YR2/1　黒色砂質粘土　しまりなし　粘性なし
　上面に直径５～15㎝の礫多量に混入
2.10YR3/2　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性なし
3.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　硬くしまる　粘性なし

EP1(e-e')
1.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　しまりなし　粘性なし

EP2.3(f-f')
1.10YR1.7/1　黒色砂質粘土　　しまる　粘性弱

EP4(g-g')
1.10YR2/1　黒色砂質粘土　　しまりなし　粘性弱　土師器混入

EP5(h-h')
1.10YR1.7/1　黒色砂質粘土　　しまりなし　粘性弱
2.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　しまりなし　粘性なし

EP6(i-i')
1.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　　しまり弱　粘性あり

EP7(j-j')
1.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　しまりあり　粘性弱　土師器混入

EP8.9(k-k')
1.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性弱　土師器混入
2.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　しまりあり　粘性弱　土師器混入

EP10.11(l-l')
1.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性弱　礫多量混入
2.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　ややしまる　粘性なし
3.10YR3/2　黒褐色シルト粘土　　ややしまる　粘性弱
4.10YR4/3　にぶい黄褐色シルト粘土　ややしまる　粘性なし
5.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性弱

遺構から土器の出土はなかった。

第10節　第22ｄトレンチ（Ｔ22ｄ）（第90図）

Ｔ22ｄは13グリットに幅1.5～2ｍ×長さ11.5ｍのトレンチとして設定した。調査面積は20㎡である。

（1）遺構

レンズ状の落ち込み（ＳＸ３）1基、不整形な溝跡（ＳＤ13）1基を検出した。ＳＤ13はこれ以上東には続かないとみられる。このトレンチの遺構保存のため検出のみにとどめた。

（2）遺物の出土状況

ＳＸ３から縄文時代の尖底土器および石器が出土した。ＳＤ13から土師器片が出土した。

第11節　第22ｅトレンチ（Ｔ22ｅ）（第92図）

Ｔ22ｅは12グリットに幅1ｍ×長さ4.9ｍのトレンチとして設定した。調査面積は4.9㎡である。

（1）遺構

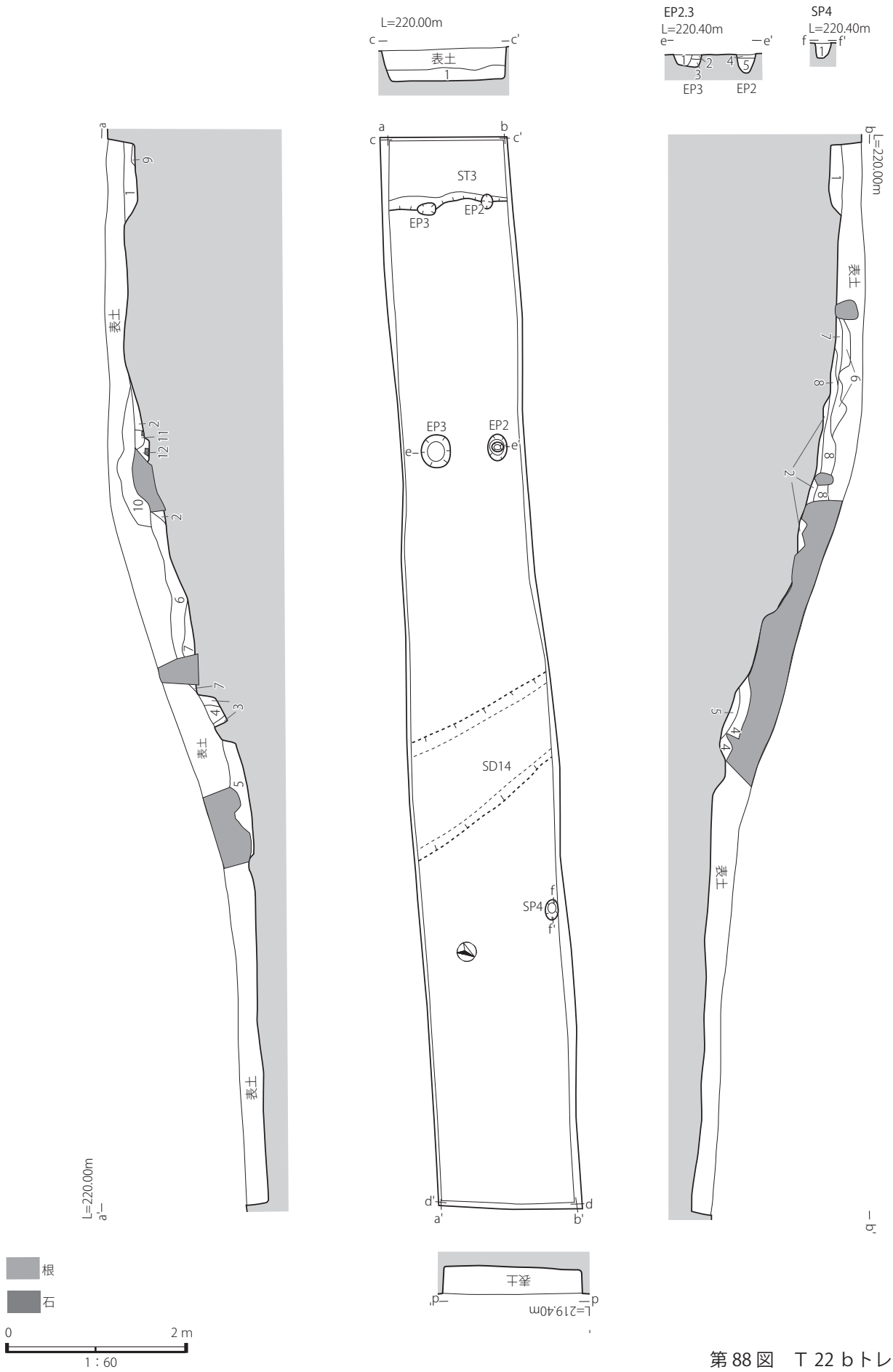
遺構は検出されなかった。

（2）遺物の出土状況

遺物は出土しなかった。

第12節　第23トレンチ（Ｔ23）（第91図）

Ｔ23はＫ14～Ｋ15グリットに幅2ｍ×長さ11.2ｍのトレンチとして設定した。調査面積は22.4㎡である。



第 88 図　T 22 b トレンチ

T22b （a-a'　b-b'　c-c'　d-d'）
1.10YR1.7/1　黒色シルト粘土　土器混入　しまりなし　少量粘性あり
2.10YR2/1　黒色砂質粘土　直径 5㎝角礫３％混入　しまり弱　粘性弱
3.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性なし
4.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　しまる　粘性弱
5.10YR3/3　暗褐色砂質粘土　しまりなし　粘性弱
6.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　しまりなし　粘性なし
7.10YR2/1　黒色シルト粘土　しまり弱　粘性弱
8.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性弱
9.10YR2/3　極暗赤褐色シルト　しまり弱　粘性弱　焼土か
10.10R2/3　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性弱
11.10YR1.7/1　黒色砂質粘土　しまり弱　粘性弱
12. 10YR2/1　黒色砂質粘土　直径 10㎝角礫混入

EP2.3（e-e'）
1.10YR2/1　黒色砂質粘土
2.10YR1.7/1　黒色砂質粘土 .
3.10YR2/3　黒褐色砂質粘土
4.10YR2/1　黒色砂質粘土
5.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　礫混入

SP3（f-f'）
1.10YR2/1　黒色シルト粘土

（1）遺構

竪穴住居跡（ＳＴ６）、溝跡（ＳＤ 15）、土坑（ＳＤ 16・17）、柱穴を検出した。

ＳＴ６について、Ｔ 20 ｂのＳＴ６と同一遺構としたが、Ｔ 23 のＳＴ６がやや不整形で方向軸が不明ではあるため次年度以降の調査による確認が待たれる。また、ＳＴ６の床面について遺構保存のため検出のみにとどめた。また、Ｔ２０ｂにおいてＳＴ６を切ってほぼ南北に延びるＳＤ 15 であるが、Ｔ 23 においてもＳＴ６を切ってほぼ南北を軸に直線的に走るとみられる。また断面観察よりＳＤ 15 はＳＫ 17 より新しいと思われる。

トレンチ北半には礫が混入した整地層が確認された。

（2）遺物の出土状況

ＳＴ６覆土およびＳＤ 15 の溝壁面からは土師器片が、ＳＤ 15 覆土からは須恵器甕破片が出土した。ＳＫ 17 からは遺物は出土しなかった。

第 13 節　第 24 トレンチ（Ｔ 24）（第 93 図）

Ｔ 24 はＫ 14 グリットに幅 1.4m ×長さ 3.3 mのトレンチとして設定した。調査面積は 5.16 ㎡である。

（1）遺構

柱穴（ＳＰ１・２・３）、土坑（ＳＫ 19）、性格不明遺構（ＳＸ４）を検出した。遺構保存のため検出のみにとどめた。

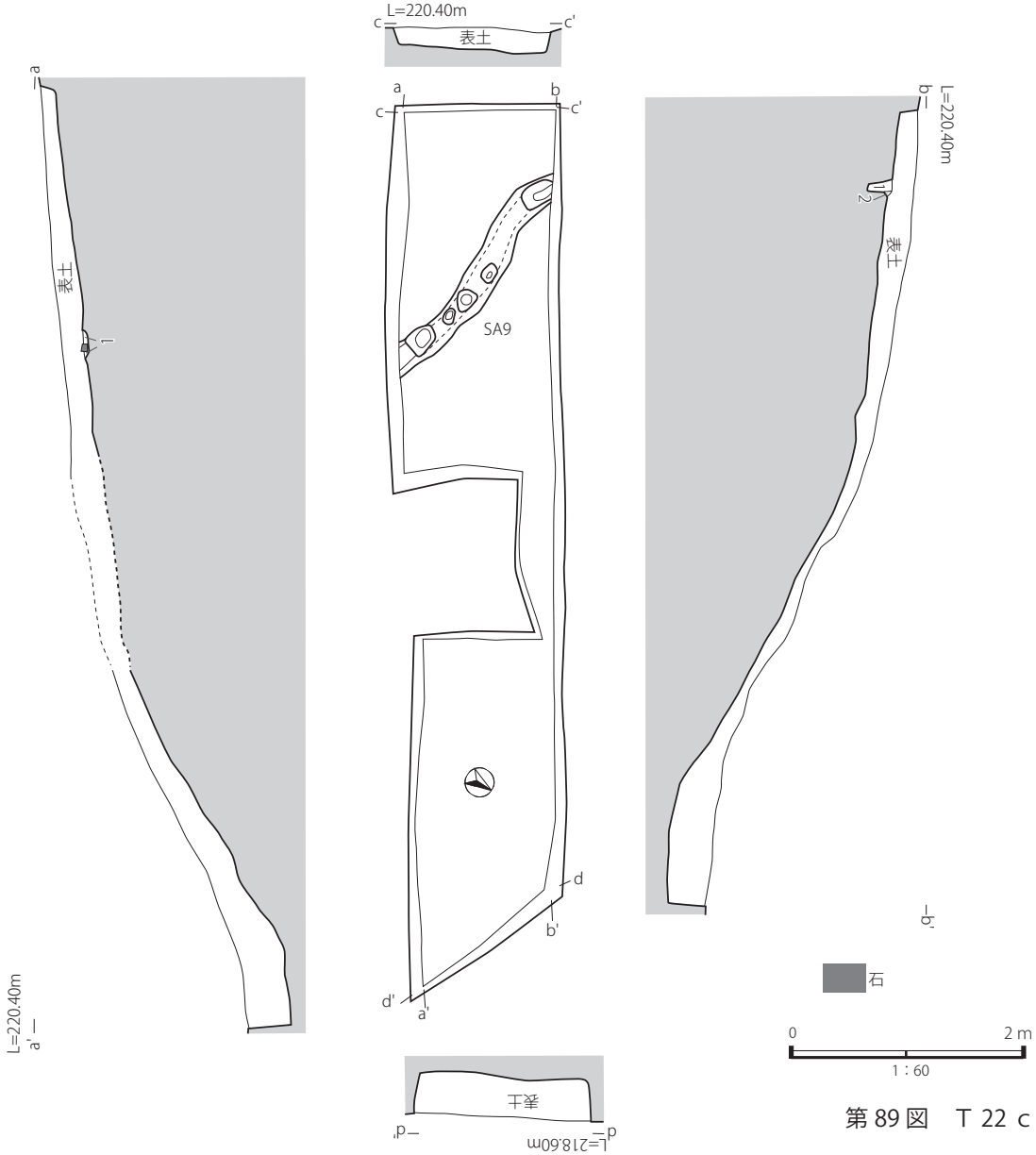
（3）遺物の出土状況

遺物は出土しなかった。

Ⅳ　調査結果

今年度の調査では南森丘陵南半の頂部および東斜面について 11 本のトレンチを設定し発掘調査を行った。その結果竪穴住居跡５棟および礫を多量に含む整地範囲、土塁状遺構、溝、柱穴、布掘の溝を伴う柱穴列などが確認できた。

竪穴住居跡について、Ｔ 20 ｃでＳＴ４とＳＴ５が重複していることが確認できたことから、この場所では少なくとも２時期にわたって集落が形成されたとみられる。またＳＴ３とＳＴ６



第 89 図　T 22 c トレンチ

T22c

a-a'

1.10YR3/3　暗褐色砂質粘土　しまり弱　粘性弱　直径 5㎝礫混入

b-b'

1.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性弱

2.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性弱

T22d

a-a',d-d'

1.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性少量あり　ややしまる

2.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまる　直径２～ 10㎜礫７％混入
縄文土器混入

3.7.5YR3/1　黒褐色砂質粘土　粘性弱　しまる　直径２～５７㎜礫７％混入

4.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性なし　しまり弱　直径２～ 3㎝礫
少量混入

5.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性少量あり　しまる　直径 0.5 ～ 10㎝礫
混入　直径 0.5㎝礫 15％混入　土師器混入

6.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性あり　しまる　直径２～ 5㎜礫２％混

7.10YR3/3　暗褐色砂質粘土　粘性弱　しまる　直径２～５㎜礫５％混入

8.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性弱　ややしまる

b-b'

1.10YR3/2　黒褐色砂質粘土　粘性なし　硬くしまる

2.7.5YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性なし　しまる　縄文土器・石器多く混入

3.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性なし　ややしまる

4.10YR3/2　黒褐色砂質粘土　粘性なし　しまり弱

5.10YR3/3　暗褐色砂質粘土　粘性なし　硬くしまる　直径 1㎝礫混入

6.10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性弱　しまる

7.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　粘性少量あり　しまる　東壁の５層

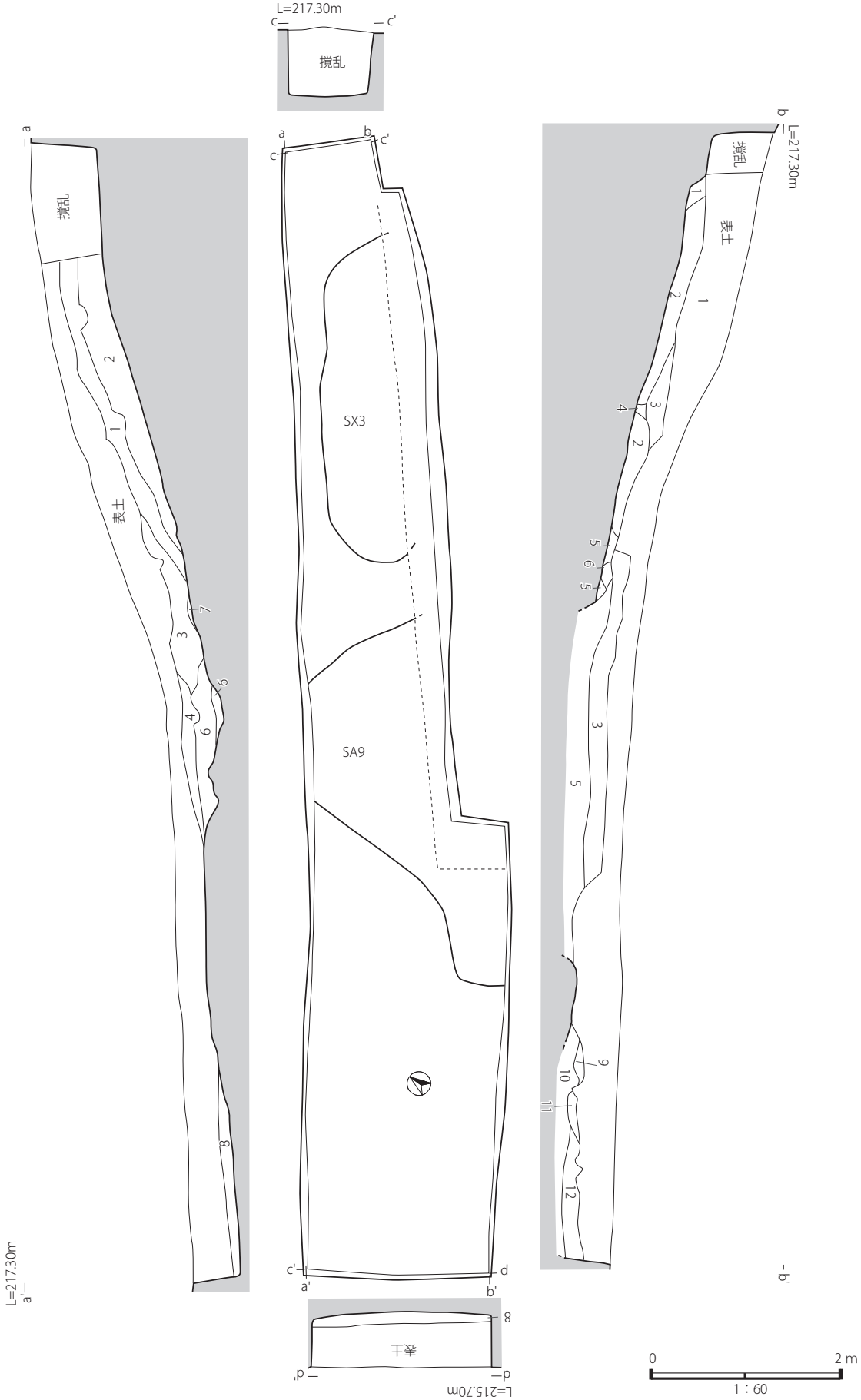
8.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　粘性あり　しまり弱

9.10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性なし　しまり弱

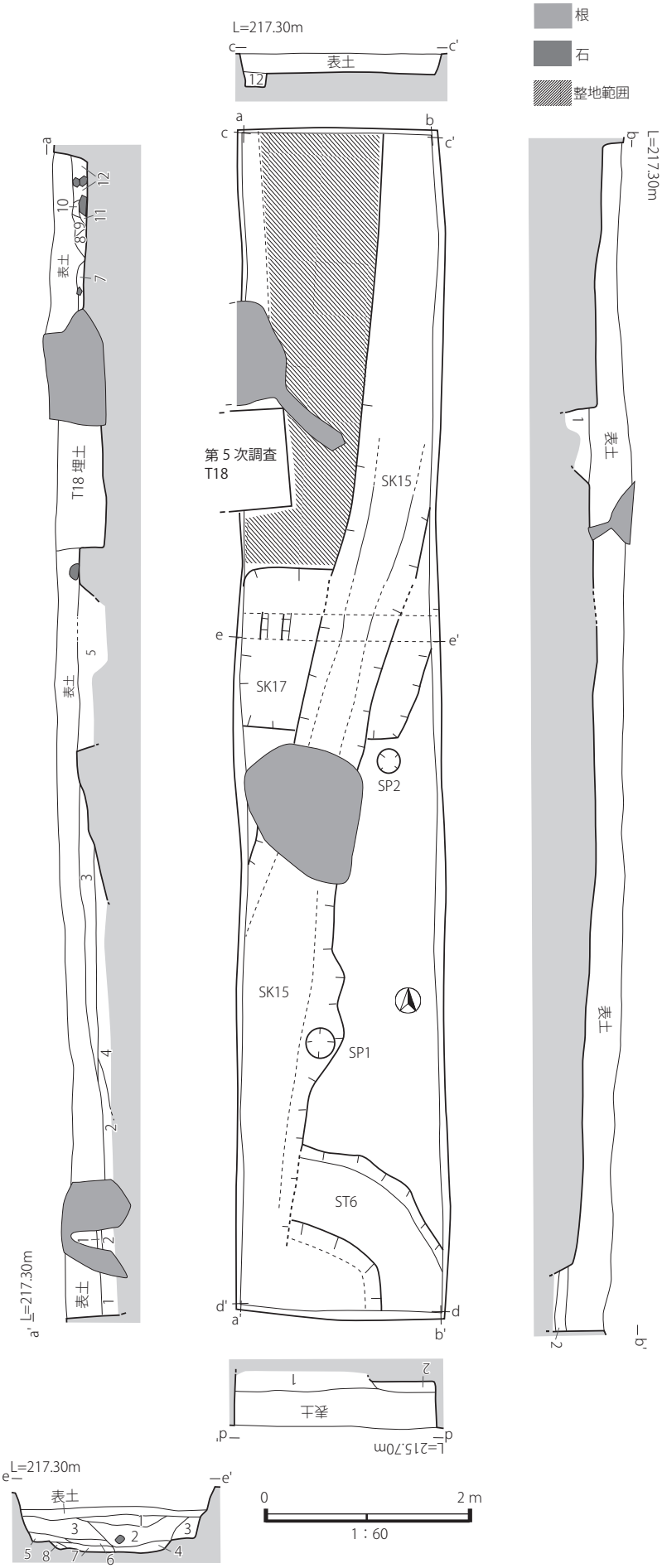
10.10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性弱　しまり弱

11.10YR2/1　黒色砂質粘土　粘性弱　しまり弱

12.7.5YR1.7/1　黒色砂質粘土　粘性弱　しまり弱



第 90 図　T 22 d トレンチ



T23

a-a'　c-c'

1.10YR1.7/1　黒色シルト粘土　しまり弱
　粘性あり
2.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　ややしまる　粘性弱
　粗砂混入
3.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　ややしまる　粘性弱
4.10YR2/1　黒色砂質粘土　しまる　粘性弱
5.10YR3/3　暗褐色砂質粘土　しまり弱　粘性なし
6.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　しまる　粘性弱
7.10YR5/4　にぶい黄褐色砂質粘土　しまる
　粘性なし　　粗砂混入
8.10YR3/3　暗褐色砂質粘土　しまる　粘性弱
　粗砂混入
9.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　しまる　粘性あり
10.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　しまる　粘性弱
11.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　しまる　粘性弱
12.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　しまる　粘性弱

b-b'

1.10YR1.7/1　黒色シルト粘土　しまり弱　粘性あり
2.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　しまる　粘性弱

d-d'

1.10YR1.7/1　黒色シルト粘土　しまり弱　粘性あり
2.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　しまる　粘性弱

e-e'

1.10YR2/1　黒色砂質粘土　しまる　粘性弱
2.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性弱
3.10YR2/3　黒褐色砂質粘土　しまる　粘性弱
4.10YR3/1　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性あり
5.10YR3/3　暗褐色砂質粘土　しまり弱　粘性あり
6.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性弱
7.10YR3/1　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性あり
8.10YR2/1　黒色砂質粘土　しまり弱　粘性弱

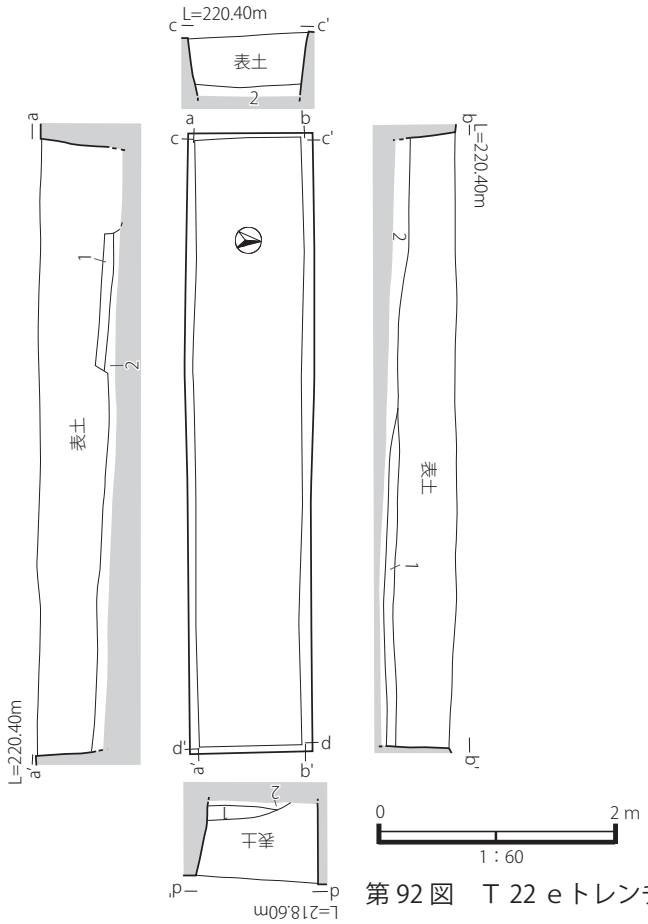
T22e　(a-a' b-b' c-c' d-d')

1.10YR2/1　黒色砂質粘土　ややしまる　粘性弱
2.10YR2/2　黒褐色シルト粘土　ややしまる
　粘性弱

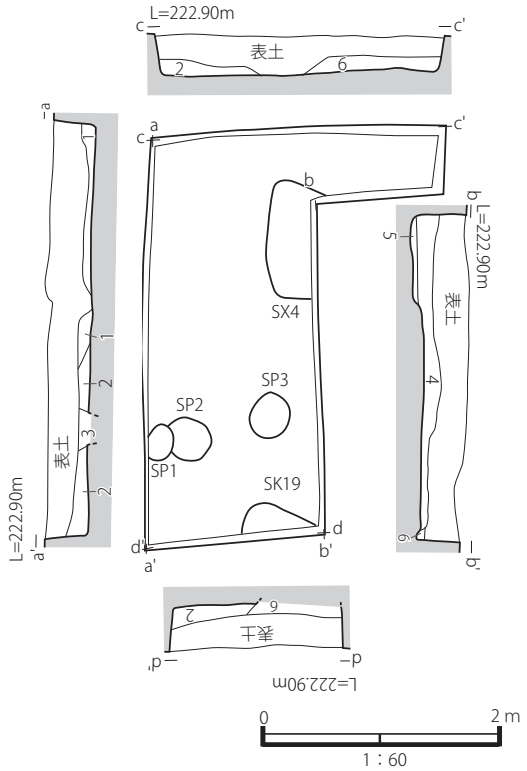
T24　(a-a' b-b' c-c' d-d')s

1.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性あり
2.10YR2/2　黒褐色砂質粘土　しまり弱　粘性あり
3.10YR2/1　黒色砂質粘土　しまり弱　粘性あり
4.10YR3/3　暗褐色砂質粘土　粘性弱　しまる
5.10YR2/1　黒色砂質粘土　しまりなし　粘性なし
6.10YR2/1　黒色砂質粘土　しまり弱　粘性あり

第 91 図　T 23 トレンチ



第 92 図　T 22 e トレンチ



第 93 図　T 24 トレンチ

では壁面に沿ってベッド状遺構と思われる施設が確認された。

しかし、本遺跡はトレンチ調査であるため遺構の広がりなど不明な部分が多く、第六次調査を終えた現在でもこの遺跡の全体像が掴みきれていないことは否めない。

参考・引用文献

1984　吉野一郎「郡山　矢ノ目館跡遺跡」南陽市埋蔵文化財調査報告書第 1 集

1985　佐藤庄一「沢田遺跡発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財調査報告書第 88 集』山形県教育委員会

1986　渋谷孝雄「諏訪前遺跡発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財調査報告書第 102 集』山形県教育委員会

1988　南陽市編さん委員会　「南陽市史考古資料編」南陽市史編集資料

2004　佐藤鎮雄「第 1 部・Ⅰ置賜地域稲荷森古墳群」『出羽の古墳時代』高志書院

2007　伊藤邦弘「梅ノ木前 1 遺跡」『山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 160 集』山形県埋蔵文化財センター

2010　髙桑弘美・佐藤祐輔「百刈田遺跡 1 ～ 4 次発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 184 集』山形県埋蔵文化財センター

2011　佐藤鎮雄「第 1 章花咲く最上川流域の古墳文化」『やまがたの古墳時代－最上川流域のムラと古墳－』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

2013　吉田江美子「郡山遺跡群・富貴田遺跡発掘調査報告書」南陽市埋蔵文化財調査報告書第 6 集

2013　山田渚・吉田江美子「長岡山遺跡・長岡山東遺跡発掘調査報告書」南陽市埋蔵文化財調査報告書第 7 集

2016　吉田江美子「唐越遺跡発掘調査報告書」南陽市埋蔵文化財調査報告書第 12 集

2023　角田朋行「第五次長岡南森遺跡確認調査」『南陽市遺跡分布調査報告書（11）』南陽市埋蔵文化財調査報告書第 24 集

Ⅴ　炭素年代測定について

試料（NNY-No115）は、T20 c の ST3 底面付近で検出された板状の炭化物から採取した。炭化物の 14C 年代は 1817 ± 20yrBP である。暦年較正年代（1 σ）は、212AD ～ 248AD。暦年較正年代（2 σ）では、165AD ～ 325AD の間に三つの範囲で示される。

当該板状炭化物に使用された木材は弥生～古墳時代前期に相当する年代値を示している。

南陽市教育委員会様１点の年代測定

2023 年 10 月 13 日

山形大学高感度加速器質量分析センター

１．はじめに

南陽市教育委員会様よりご依頼頂いた試料１点（写真１）に対して、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

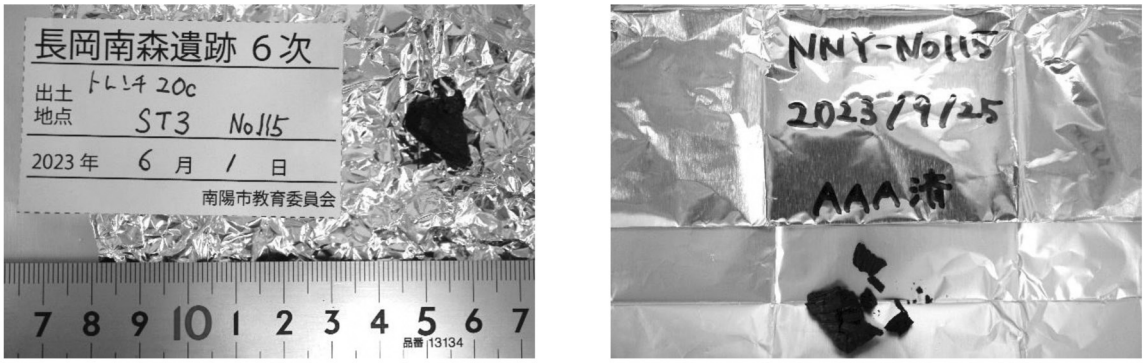


写真１．試料情報

２．試料と測定方法

表１に試料情報を示す。測定試料は、元素分析計、質量分析計、ガラス真空ラインより構成されるグラファイト調整システムにてグラファイト化を行った。その後、加速器質量分析装置（NEC 製 1.5SDH）を用いて放射性炭素濃度を測定した。

３．結果

表２に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行った放射性炭素年代、較正曲線データを使用して放射性炭素年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。試料の暦年較正結果については、本報告書に添付した。

＝＝＝＝　年代測定の考え方　＝＝＝＝

放射性炭素（^{14}C）年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5730±40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.4.4[1]（較正曲線データ：IntCal20[2]）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

参考文献

１）C Bronk Ramsey, BAYESIAN ANALYSIS OF RADIOCARBON DATES, Radiocarbon, 51 (1), 337-360 (2009).

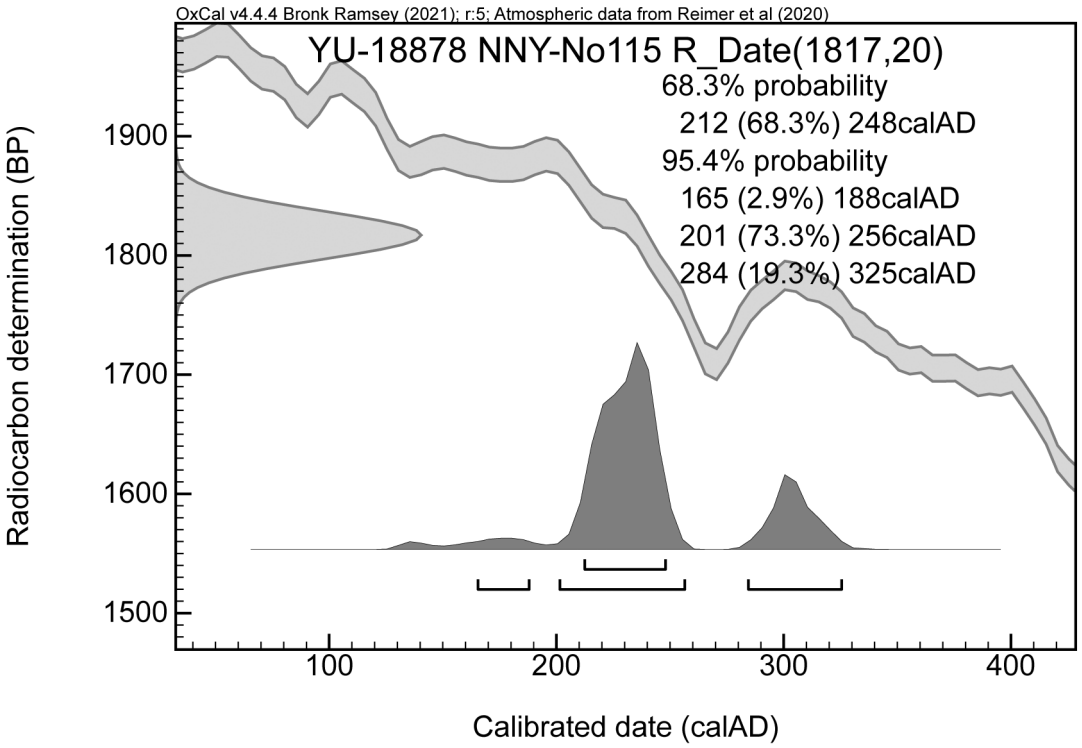
２）Paula J Reimer, William E N Austin, Edouard Bard, Alex Bayliss, Paul G Blackwell, Christopher Bronk Ramsey, Martin Butzin, Hai Cheng, R Lawrence Edwards, Michael Friedrich, Pieter M Grootes, Thomas P Guilderson, Irka Hajdas, Timothy J Heaton, Alan G Hogg, Konrad A Hughen, Bernd Kromer, Sturt W Manning, Raimund Muscheler, Jonathan G Palmer, Charlotte Pearson, Johannes van der Plicht, Ron W Reimer, David A Richards, E Marian Scott, John R Southon, Christian S M Turney, Lukas Wacker, Florian Adolphi, Ulf Büntgen, Manuela Capano, Simon M Fahrni, Alexandra Fogtmann-Schulz, Ronny Friedrich, Peter Köhler, Sabrina Kudsk, Fusa Miyake, Jesper Olsen, Frederick Reinig, Minoru Sakamoto, Adam Sookdeo, Sahra Talamo, THE INTCAL20 NORTHERN HEMISPHERE RADIOCARBON AGE CALIBRATION CURVE (0–55 CAL kBP), Radiocarbon, 62, 1-33 (2020).

表１．試料情報

ラボコード	測定試料名	試料情報	試料状態	処理
YU-18878	NNY-No115	南陽市教育委員会 社会教育課 埋蔵文化財係試料 2023/09/25受取 トレンチ20c ST3　No.115 炭化物試料 長岡南森遺跡 NNY-No115	前処理後の試料 132.856mgから2.145mg使用	AAA処理 1M HCl 80度1時間 1M NaOH 80度1時間（4回） 1M HCl 80度1時間

表２．放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	試料名	$\delta^{13}C$ (‰)	放射性炭素年代 (yrBP±1σ)	放射性炭素年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
YU-18878	NNY-No115	−26.04±0.21	1817±20	212AD (68.3%) 248AD	165AD (2.9%) 188AD 201AD (73.3%) 256AD 284AD (19.3%) 325AD



長岡南森遺跡確認調査　写真図版

作業状況（西より）

Ｔ 19　ＳＴ２完掘状況（北東より）

Ｔ 19　ＳＴ２完掘状況（南より）

Ｔ 19　ＳＴ２遺物出土状況（北より）

第 19 トレンチ

Ｔ 20 ａ完掘状況（東より）

Ｔ 20 ａ完掘状況（西より）

Ｔ 20 ａ土塁状遺構（整地層）（南東より）

Ｔ 20 ａ　ＳＴ６検出状況（東より）

Ｔ 20 ｂ完掘状況（西より）

第 20 ａ・ｂトレンチ
写真図版２

Ｔ 20 ｃ　ＳＴ４・５完掘状況（東より）

Ｔ 20 ｃ　ＳＴ４・５完掘状況（北東より）

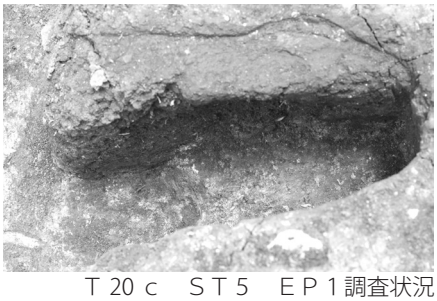
Ｔ 20 ｃ　ＳＴ４・５調査状況（東より）

第 20 ｃトレンチ（1）

Ｔ 20 ｃ　ＳＴ３調査状況
（南より）

Ｔ 20 ｃ　ＳＴ３調査状況（北東より）

Ｔ 20 ｃ　ＳＴ３調査状況（北東より）



Ｔ 20 ｃ　ＳＴ５　ＥＰ１調査状況
（北より）

Ｔ 20 ｃ　ＳＴ３調査状況（西より）

Ｔ 20 ｃ　ＳＴ５　ＥＰ２調査状況
（南より）

第 20 ｃトレンチ（２）

写真図版４

Ｔ 20 ｄ完掘状況（東より）

Ｔ 20 ｄ完掘状況（西より）

Ｔ 20 ｄ　ＳＰ群（北より）

Ｔ 21 完掘状況（南西より）

Ｔ 21　ＳＰ群・ＳＤ 11（西より）

Ｔ 21　ＳＡ１（北東より）

（左）Ｔ 22 ｂ完掘状況（南西より）
（上）Ｔ 22 ｂ完掘状況（北東より）

Ｔ 22 ｃ完掘状況（南西）より）

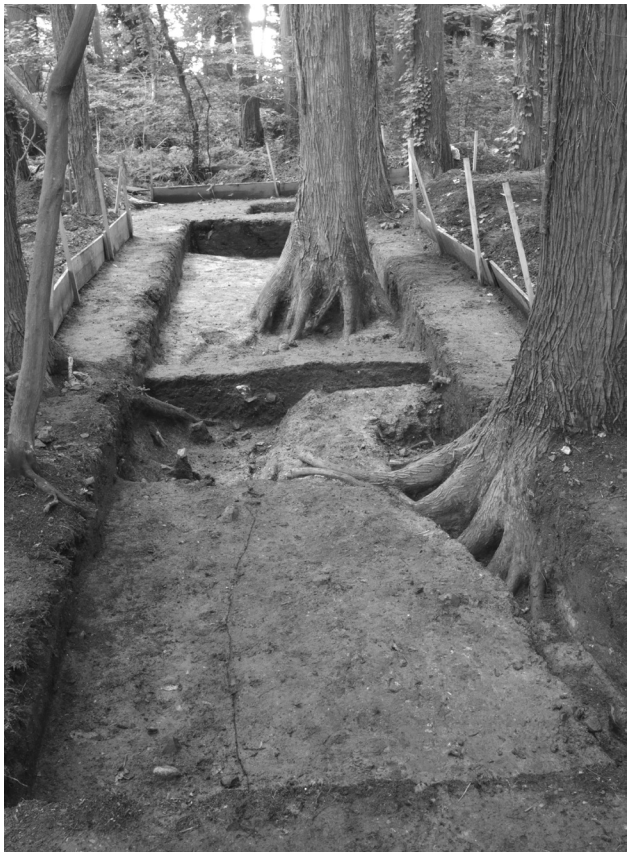
（左）Ｔ 22 ｄ完掘状況（北東より）
（上）Ｔ 22 ｄ完掘状況（北西より）
第 22 ｂ・ｃ・ｄトレンチ

Ｔ 22 ｅ完掘状況（南西より）

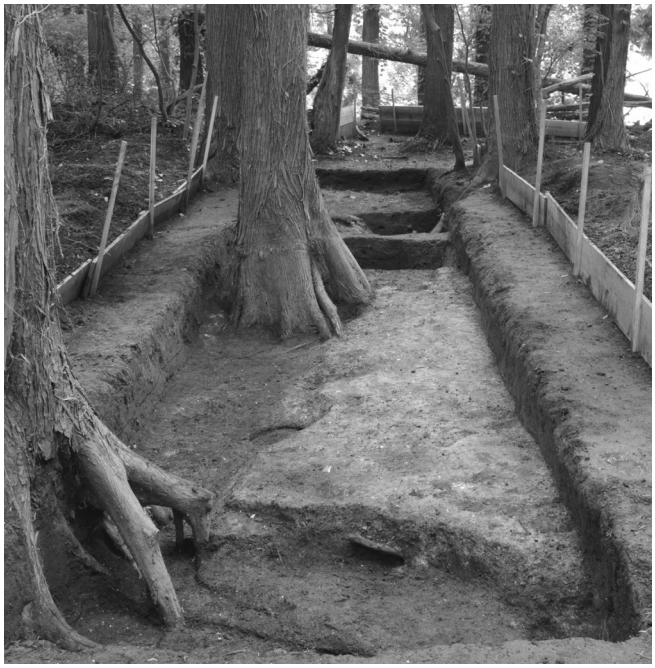
Ｔ 24 完掘状況（東より）

Ｔ 24 完掘状況（北西より）

Ｔ 23　ＳＴ６・ＳＤ 15 検出状況
（南より）



Ｔ 23 完掘状況（北より）



Ｔ 23 完掘状況（南より）

小型甕

甕体部

高坏脚部

報告書抄録

ふりがな	なんようしいせきぶんぷちょうさほうこくしょ
書名	南陽市遺跡分布調査報告書（12）
副書名	市内遺跡分布調査・第六次長岡南森遺跡確認調査（概報）
巻次	
シリーズ名	南陽市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第25集
編著者名	角田朋行
編集機関	南陽市教育委員会
所在地	〒999-2292　山形県南陽市三間通436番地1　TEL 0238-40-3211
発行年月日	2024年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
市内遺跡	山形県 南陽市 地内	6213	—	—	—	2023	—	—
長岡南森遺跡（ながおかみなみもりいせき）	山形県（やまがたけん） 南陽市（なんようし） 長岡字南森（ながおかあざみなみもり） 1650-1他	6213	052	38°02′13″	140°9′28″	20230501 ～ 20230719	152.5	遺跡確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
市内遺跡	—	—	—	—	—
長岡南森遺跡（ながおかみなみもりいせき）	散布地	縄文時代・古墳時代・古代	溝跡・柱穴・土坑 竪穴住居跡	縄文土器・石器 土師器・須恵器・	長岡字南森丘陵においてトレンチ調査を行い、遺跡の性格・時代等を確認した。

要約	市内遺跡：市内における各種開発事業に伴う踏査、試掘調査、立会調査および広域調査。 長岡南森遺跡：本遺跡は南陽市内の国指定史跡の前方後円墳・稲荷森古墳から南東へ130ｍに位置する独立丘陵に位置する。長岡南森遺跡は、南森と呼ばれる独立丘陵地を中心とする遺跡である。平成5年度から南陽市教育委員会で踏査を続けてきたが、平成28年度に南陽市教育委員会による遺跡の現状把握と今後の調査および遺跡保護の基礎資料を得ることを目的に測量調査を実施した。今年度調査においては丘陵南半を中心にトレンチを入れたところ、竪穴住居跡、柱穴、柵列、溝を確認した。また縄文時代・古墳時代・古代の遺物が出土した。

南陽市埋蔵文化財調査報告書第 25 集

南陽市遺跡分布調査報告書（12）

市内遺跡分布調査

第六次長岡南森遺跡確認調査（概報）

2024 年 3 月 31 日

発行　南陽市教育委員会
〒 999-2292　山形県南陽市三間通 436 番地の 1
電話　0238-40-3211 ㈹
印刷　有限会社文進堂印刷
〒 999-2221　山形県南陽市椚塚 811 番地の 3
電話　0238-43-2116